本願寺ゟ聖人

504
174

始

本願寺の聖人

304-174

帝國圖書館藏

本願寺の聖人

大正
12. 4. 23
内交

立教開宗七百年を迎ふるにあたり、
虔みて、この小著をわが聖人の御前
に捧げたてまつる。

告白

一　本書は、聖人を傳するものでなくて、聖人の聖德を讃仰せるもの。

二　本書は、事實の考證に努めず、專ら在來の傳記より得來りし著者の所感を告白せるもの。

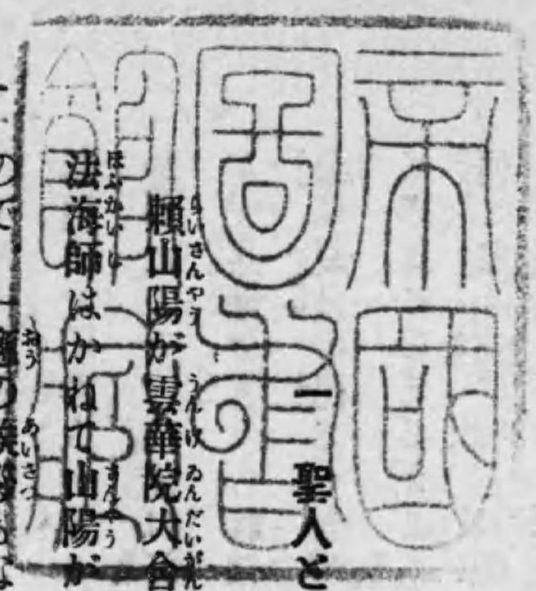
三　本書は、字句の統一を闕くの嫌ひあれど、往々原文のまゝを適用せしは、原文固有の妙味を保留せんとするに外ならず。

目次

一、聖人と當代の高僧……一
二、聖人の誕生、出家……九
三、出家後の聖人……一三
四、吉水の入室……一九
五、入室後の聖人(上)……二三
六、入室後の聖人(中)……二八
七、入室後の聖人(下)……三九
八、吉水の迫害……五八

九、聖人の流罪……六二
一〇、流罪後の聖人(上)……七〇
一一、流罪後の聖人(中)……七六
一二、流罪後の聖人(下)……八七
一三、聖人の歸洛……九一
一四、歸洛後の聖人……一〇〇
一五、聖人の入滅……一一八
一六、聖人の滅後……一二五
一七、聖人の行狀……一三一
一八、聖人の宗風……一三〇

本願寺の聖人



一 聖人と當代の高僧

高木櫪堂著

賴山陽が雲華院大合師の紹介によりて、易行院法海師に面會せられたとき、法海師はかねて山陽が楠公の傳をかきて、聊か慢心を懷ける由を聞かれてゐたので、一應の挨拶もなく、出し抜けに、「近頃承れば、藝州の儒者賴久太郎なるもの、京にありて酒を飲み、三年其親を省せず、而して忠臣楠子の傳を作り

しとか、さても足下の事であるか、凡そ忠臣は必ず孝子の門に出づ、今足下如き不孝人の筆を以て忠臣の傳を書いたとて、楠公は決して屑しとなさるまい老耶また不孝人を見ることは望まない」と云ひはなちたるまゝ振向きもされなかつたので、山陽は汗を流して慚愧し、雲華院の注意によりて、直に故郷に歸り、其母を省せられた。其時山陽が大含師にむかひ好意を謝せられた語に、「海公は夏日の恐るべきが如く、上人は則ち冬日の親しむべきが如し」と申されたとのことであるが、私共は我親鸞聖人と他の高僧方とを比較して。そこに、何となく右の咄しに似たやうな感じがせらるゝのであります。

我聖人の出世時代、若しくは其前後に當りて、隨分有名なる高僧碩德が輩出せられました。夫の幼なき頃より出離菩提の志堅く、ひとたびは火箸を以

其面を焚かんとし、再び佛眼如來の御前に其耳を斷ち、其後出家して深く敎界の墮落を憤り、『山寺は法師くさくて居たからず、心きよくば糞ふくにても』との一首を殘して、久しく紀州白上の峰ふかく隱れられしは、栂尾の明慧上人であつた。又二十九歳のとき、宮中の法會に招かれ、都法師、山法師たちと席を同うするを愧ぢて、其跡を晦まされしは、笠置の解脫上人であつた。また脫然、俗界を超逸して、青鞋破笠、天下を横行し、賴朝より贈られし銀猫を拋ちて顧みざりしは、詩人西行であつた。はたまた短軀稜骨の裏に、鬱勃たる英志を包み、再び宋に入りて禪林の幽邃を探り、將軍賴家の知遇を受けて建仁寺を創せし榮西禪師の如き、或は飽くまで名利を避けて遠く越の山中に入り、後嵯峨上皇より勅賜の紫衣も、空しく之れを高閣に束ね『永平雖二谷淺一勅命重重却

被二猿鶴笑一紫衣一老僧』と咏じて、一生之れを用ゐざりし永平の道元禪師の如き。此外、なほ夫の日蓮上人を數へんか、上人は一身を法華經に捧げて、唱題成佛の旗幟を翻し、四箇格言を唱へて諸宗を罵倒し、鐵火を踏みて悔いざりし勇氣は眞箇百世の下、懦夫をして起たしむるの慨がある。されど薄志弱行、ふかく我力の足らざるを自覺する私共に取つては、むしろ高嶺の花を眺め、山月に嘯く猛虎に對するが如く、其隔たりの餘りに甚しく、また親しみ近づき難いところがあるやうに思はれます。

若、賴山陽の口吻を摸して申しましたら、事固より其の比を失ふに似たれど夫の威儀儼然として寸毫の罪惡をも假借するところなかりし持戒堅固の明慧解脫の二上人は、恰も凛烈指を落とす嚴冬の霜雪に譬ふべく、また質朴高潔にして名利の外に超然たりし西行法師や道元禪師は、之れを積雪中の老梅か、ある

は皎々たる秋月に喩ふべく、若夫れ、入宋求法の榮西禪師や、剛宕不羈の日蓮上人に至つては、宛ながら光焰石を焦がす夏日の厲しきに例ふべきであらうと思はれる。これ名利に耽り、愛慾に沈み、罪惡に苦しむ私共が、到底企て及ぶべきことでなく、むしろ其影を逐ふことさへ、殆んど望みの絶えはてたことであります。

今、是等の諸高僧に對して、十惡の法然房、愚痴無痴の源空と稱し給ひし、我法然聖人の行狀を思ひくらべまするに、また何となく一種溫和なる風格に接せらるゝやうであります。されどなほ持戒清淨にして、念佛幾萬遍の日課を嚴修し、或は道譽天朝に達し、帝王の戒師となりて、禁裡に聖敎を披講し、また

は大原の勝林院にて、南都北嶺の高僧碩徳三百餘人を屈伏せしめられたるが如き、さすがは智慧第一の聖人、勢至菩薩の化現、之れを愚痴鈍根の我等凡夫に比して、なか〳〵思ひ及ばざる差違が感せられるのであります。

乃ち更に之れを我親鸞聖人に比ぶるに、我聖人が肉食妻帯して一生を田夫野叟の群に投じ、晴れがましき唱導は之れを辭して、自ら賀古の教信沙彌の定なりと稱し、たゞ如來の御代官として自信教人信の大訓を實踐し。親鸞さらに珍らしき法をも弘めず、誰れを教へてか弟子といはん、たゞ御同朋御同行なりと自他師弟の區別を去りて、同一念佛の法味を愛樂したまひし行狀は、聖道餘宗の諸師は言ふまでもなく、同じ淨土一家の法然聖人に對しても、明かに其相違が認められ、然も我聖人と我等凡夫との間には反つて何等の溝渠もなく、隔たりもなく、七百年前の我聖人のお行狀は、直に七百年後の我等が行狀といふべく、七百年後の我等が行狀は正に我聖人が七百年前に於いて實行し給ひしお行狀であつたかのやうに思はれます。かくて聖人は我等往生の先達として無比の好模範となり、我等はたゞ聖人の御跡を慕ひ、聖人の行きたまひし途を一向に進むより外はないのであります。我等は聖人の寵兒にして聖人は我等の悲母である、悲母の聖人に對すれば法然聖人は慈父であり、聖道の諸師は嚴師である。嚴師は恐るべく、慈父は敬すべく、悲母は愛すべく、我等が聖人に對するは、たゞ赤兒の悲母を慕ふが如く、親しみ憧れてそこひなき其の溫情に哺まるゝ外はないのであります。若、聖道の諸師を嚴冬淸秋盛夏等に喩へたるに准ふれば、我聖人はまさに和風駘蕩の陽春に喩ふべきであらうと思はれます。我等は春

風に對するごとに、常に一種の快感が覺えらるゝ、平和と怡樂とは眞に春風の賜ものであり、希望と安慰とはまた春風の齎すところである。かの明法房辨圓が、一たび我聖人の慈容に接して、害心たちどころに消滅し、無二の渴仰を生せしは、堅く結びし氷の春風に遇ふて痕なく溶け去りしに比すべきであらう。

袖ひぢて結びし水のこほれるを
春たつけふの風やとくらん

あゝ春風と聖人、これ實に我聖人をたゝえたてまつるべき無比の頌辭である。私共は世の人々が早く春風の如き我聖人の悲心に觸れ、迷ひの胸底深く結ぼれし煩惱の氷の溶かれるやうに念願したいのである。

二　聖人の誕生、出家

我聖人の誕生は、釋尊の降誕と月を同じうする承久三年の四月一日。釋尊の早く生母摩耶夫人に訣れ、姨母波闍波提の手に人となりたまひし如く、我聖人もまた幼にして父母を失ひ、叔父範綱卿の養子となられたのであつた。しかも其家系は釋存の如く王種にはあらざりしも、『朝廷に仕へて、霜雪をもいたゞき、射山に越て、榮花をもひらくべかりし人』本傳であつて、決して私共のやうな普通一般の平民ではなく、所謂雲の上の殿上人のお家柄であつたに違ひない。また其出家は、釋尊の四門に出遊して生老病死の苦相を觀じたまひしには似ざれど、同じ人生の無常を感じ、悲慘なる現世の苦を脱がれんが爲めなり

しことは、『明日ありとおもふこゝろは仇櫻、夜半の嵐のふかぬものかは』の一首によりて、明かに之れを認め得らるるのであります。

なほ聖人の出家について、私共は今更ながら痛切なる幾多の教訓を感せられます。かの聖人の出家が、丁度百華咲き香ふ春の眞盛りであつたのは、また私共をして一層の靈感に觸れしむるわけではありませんか。

私共は夫の春の胡蝶が、花に舞ひ香に浮かれて狂ひ回はるが如く、常に現世の歡樂を慕ひ、權勢に憧れ、愛欲に囚へられ、吾身を忘れはてゝ居るのであります。しかも春の逝き易く、花の色香の持ち難きが如く、此世の榮華は、決して永く續くものでもなく、家庭團欒の和樂も、敢て久しきを持つことの出來るものではありませぬ。『生死の常道は轉た相嗣いで立ち、或は父は子を哭し、或

は子は父を哭す、兄弟夫婦更るゝ相哭泣す、顚倒上下して、無常の根本なり。皆過去にゆいて常しへに保つ可からず』と、若、靜に人世のことを考へたならば、私共は幻の世界に、幻の身を以て、幻の榮華を求め、限りある壽命を以て、限りなき欲望を滿たさんとしつゝあるのであります。かの秋風に尾羽打ち枯らし、色褪せ香失せたる返り咲きの花をあせる胡蝶の運命を吾身に思ひ合せたら、私共は決して悠々として現世の境遇に執着せらるゝ譯のものではなく、必ず深く人生の根本問題を自覺し、いそいで生死の一大事を落着せしむべき筈なのであります。

然るに『人間總々として衆務を營み、年命の日夜に去るを覺えず』禮讃偈。風前の燈火にも似たる危き運命の身ながら、たゞ現世の事に驅られて、生死出離の大

事を忘却し、一生夢の如く、意義なき生活を續けつゝあるのは、何たる淺ましい愚なことでありましやうか。釋尊の『世人薄俗にして、不急の事を諍ふ』大經と仰せられたのは、實に適切なる御教訓であります。私共は此御教訓を事實としてお示しなされた我聖人の御精神に對して深く慚愧し、遲れながらも、聖人のみ跡を慕ひ、其御精神を學ばねばならぬことであります。

あゝ生死無常、これぞ佛教實踐の第一歩にして、釋尊をはじめ、古來名僧知識の先達が、求道の門戸に這入られた唯一の契機である。『佛法には明日といふことはあるまじき由に候』御一代聞記聞書の一句、まことに骨に刻み肝に銘じて、忘る可らざる御教訓であります。

三　出家後の聖人

『法要多端、御疎音過候。今度有範之幼童松若丸事、師弟之遂二契約一、去月二十八日、若狭守、被二連參一得度致、範寛小納言與爲ン改候。折節

春深き花のにしきも引かへて

すへたのみある露染の袖

誠秀才之童形、賴母敷令二大慶一候、預御滿悅一度候、申入候也』

此は是れ、得度の師、慈鎭和尚が、我聖人剃髪後の有樣を、月輪兼實公に申送られたる一帖の消息であると傳へられてある。

さても「すへたのみある秀才の童形」は、其後いかに生たちたであらうか。『自爾以來、しば〳〵南岳天台の玄風を訪て、ひろく三觀佛乘の理に達し、とこ

しなへに楞嚴横川の餘流を湛えて、ふかく四教圓融の義に通達せり』本傳その間恩師の使命を禁裡に奉じては、師の寃罪を雪ぎ、剩つさへ「みよりの羽」の詠吟を奉りて、主上の叡感淺からず、檜皮色の小袖に、身に餘る面目を施し、また『小止觀』『往生要集』を佛前に講じて「北嶺の神龍」と歌はれ、『華嚴』を講しては本朝第一の「良辨僧正」なりとの嘉賛を享け、齡、未だ而立にだも及ばざるに、學は大小顯密を兼ね、身は既に小僧都聖光院門跡の顯職に登り、聲望滿山を壓して、無上の光榮はまさに手に唾して掌握せらるべきことゝなつたのである。されどかゝる權勢や、榮達や、果して我聖人を滿足せしめたであらうか。

惟ふに聖人の腦裏にしばらくも去る能はざるは、出離生死の一大事にして、亡き父母の菩提、わが身永劫の浮沈であつた。さても恩賜の御衣何物ぞ、紫

の衣、金襴の袈裟、大僧正、座主、はたまた何かある。畢竟是れ浮世一旦の權勢名利にして、もしやかゝる勢利に絆だされて、出家登山の本意を失はゞ、學問修行も其詮なし、あゝ『一息追はざれば千歳長く往く、何ぞ浮生の交衆を貪りて徒に假名の修學に疲れん、須らく勢利を抛つて出離を希ふべし』嘆德文。

出離の外に大事なく、菩提の外に求むべきものなし。

されど悲しきかなや、『定水を凝らすと雖も、識浪頻りに動き、心月を觀ずと雖も、妄雲なほ覆ふ』本傳『機教相應は凡慮明め難し、耨ち近くは根本中堂の本尊に對し、遠くは枝末諸方の靈窟に詣でゝ解脱の徑路を祈り、眞實の知識を求む』嘆德文。しかも、その求むるものゝ得られざるのみならず、胸中の煩悶は反つて日と共に加はり、心の苦惱は月と共に進み、訴へんに師なく、語らんに友なく、

寢ぬれば覺め、覺むれば思ひ、昏迷惱亂して、自ら爲すべき所を知らず、はては終日終夜、影暗き無動寺大乘院の一室に、年月つもる困憊疲勞の五體を横たへて、悲嘆の涙雨の如く、人知れず、密行を凝らして出離の要路に思ひ惱み、はしなく如意輪觀世音の示現を得て、夜な〳〵六角の精舍に百日の懇念を運び、膝を埋むるの積雪、膚を劈くの寒風、身に堪へがたき困難辛苦、はたして如何なりしや。思ふさへ涙に胸塞がりて、のぶる語も出ないほどである。

さるにても私共は何たる淺ましいことであらうか。浮生の緣に惹かされて、無明の闇に迷ひ、權勢榮利に憧れて、出離の大事を忘れ、恩愛の覇絆に纏つはりて、永劫の浮沈を顧みず。たとひ或るときは不慮の災厄に遭ひ、思はぬ病苦に惱みて、わが世、わが身の賴み少なきを喞てど、咽喉通れば熱さをわすれ、

偶〻佛法に志ながらも、教理や如何に、信仰や如何に、または靈魂不滅の問題や、佛陀存在の疑問などと、あられもなきことに思ひを馳せ心を煩はして、肝心なる安心立命の根據を離れ、空想妄念に驅られて、眞摯に心靈の問題を解釋せんとする精神は殆んど無いのである。かゝる浮薄なる志もて無上の大法を求め得んことは、恰も木に緣りて魚を求め、砂を煮て飯となさんと企つる如き愚かな業である。

おもへばラプチ河畔の秋さびて、ヒマラヤの雪、皓きとき、生死解脱の望み胸に燃え、王城を遁れたまひし大聖釋尊は、教を阿羅藍迦藍鬱頭藍等の論師に請ひ、しかもその巧妙なる論議にも滿足を得ずして、泣く〳〵苦行の林に入り六年の苦行に骨身を碎きて、更に何の得る所もなく、學問の途絶え、苦行の力

盡きて、菩提樹下の默想にうつり、遂に無上正覺を成じたまふたのである。學問究理はいかに進みても、生死出離の希望は滿足されず、我等が現實に嘗つゝある深刻なる人生の悲慘は、敢て苦行鍛練によりて聊かも除かれ得るものではない。たゞ眞摯なる求道心、卽ち生命をすてゝ一向に救ひの途に進みゆく至誠心によりて贏ち得らるべき唯一無二の信仰、この信仰によりてこそ、我等は最後の依怙を認め、無限の慰藉を得らるゝのである。かの「畢竟依」といひ、「大安慰」といふは卽ちこのことである。和讃にいはく『たとひ三千大千世界に、みてらん火をも過ぎゆきて、佛の御名をきく人は、ながく不退にかなふなり』。御一代聞書にいはく『佛法には身をすてゝのぞみ求むる心より信を得ることなり』。さてもたゞ生を愛みて道を求むる心なく、妄想に耽りて眞の救ひを知らざる我

等は、まさにわが心からの懺悔を作さねば、まことに悔いて返らぬ永劫の恨みを遺すべきことになるのである。

四　吉水の入室

六角堂の參籠、百日の懇願、期まさに滿ちて五更の孤枕、數行の感涙に咽びて、奇しき靈夢を感得し。更にゆくりなくも安居院の法印、聖覺に遇ふて、そゞろに大悲矜哀の測りなきを嘆じ、志を決して吉水の禪房を尋ね、昨日までは一山の門跡として錦繡の褥に座し、諸人拜趨の膝を屈したりし我聖人も、今日は早一衣一鉢の御身となり、門跡の法衣を脱ぎ捨てゝ墨染の衣をまとひたまひ、供奉の人々は暇を賜はりて、泣く〳〵も空車を曳いて聖光院に歸り去ることゝ

なつた。時しも建仁第一の暦、春のころ、聖人まさに二十九歳。

山上に贈りたまひし離山の辭にいはく。

如今兵部を以て捧二愚書一候。予、此年月合星の峯に在つて、舍那圓頓の菓を拾ひ、三密止觀の水を汲めども、頑魯にて、いまに迷惑出離の曉を知らず、生死の顚倒を常に忘れ、福林國淸及修禪の寶殿に抽二丹誠一仰二神冥慮一終に山王權現の神託をうけ、今夜この觀音の寶前に通夜せしめて、重れて菩薩の告命を蒙り、直に日頃の積願を滿足せしむ。仍て今日寶幢の場を謙下し、遁世の樞に隱れ畢ぬ。今生の拜謁是を限りに候以上

建仁元年二月十日

寶幢院內學徒中

僧都範宴

さても、この折の聖人の胸中は如何なりしぞ、いまさら固より地位權勢の慕はるゝにはあらねど、さすがは九歳登山の砌よりこのかた、二十年來住みなれし台

山を離れて、再び歸るまじと思ひさだめし身は、いとゞ離別の情切なるとゝもに、また一方には年月つもる出離の望み叶ひて、悲喜こもゞ胸に逼り、實に言ふにいはれぬ感じがせられたに違ひなからう。

かくて吉水の禪房に詣でゝ、法然聖人に謁したまへば、『眞宗紹隆の大師聖人殊に宗の淵源を盡くし、敎の理致をきはめて、懇に說き述べたまひ』本傳。我聖人はこゝに初めて、久しく他鄕にありて浮世の辛酸を嘗め盡くせし獨り子の、親の膝下に歸り逢ひしが如く、不思議にも日頃の煩悶全く去りて無我の法悅を感得したまふたのであります。『親鸞に於ては、唯念佛して彌陀に助けられまいらすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり。念佛は誠に淨土に生るゝたねにてや侍るらん、また地獄に落つる業にてや侍るらん、總じ

なつた。時しも建仁第一の暦、春のころ、聖人まさに二十九歳。

山上に贈りたまひし離山の辭にいはく。

如今兵部を以て捧二愚書一候。予、此年月台星の峯に在つて、舍那圓頓の菓を拾ひ、三密止觀の水を汲めども、頑魯にて、いまに迷惑出離の曉を知らず、生死の顚倒を常に忘れ、福林國淸及修禪の寶殿に抽二丹誠一仰二神冥慮一終に山王權現の神託をうけ、今夜この觀音の寶前に通夜せしめ〻、重れて菩薩の告命を蒙り、直に日頃の積願を滿足せしむ。仍て今日寶幢の場を謙下し、遁世の樞に隱れ畢ぬ。今生の拜謁是を限りに候以上

建仁元年二月十日　　僧都範宴

寶幢院內學徒中

さても、この折の聖人の胸中は如何なりしぞ、いまさら固より地位權勢の慕はるゝにはあらねど、さすがは九歳登山の砌よりこのかた、二十年來住みなれし台

山を離れて、再び歸るまじと思ひさだめし身は、いとゞ離別の情切なるとゝもに、また一方には年月つもる出離の望み叶ひて、悲喜こもゞ胸に逼り、實に言ふにいはれぬ感じがせられたに違ひなからう。

かくて吉水の禪房に詣でゝ、法然聖人に謁したまへば、『眞宗紹隆の大師聖人殊に宗の淵源を盡くし、敎の理致をきはめて、懇に說き述べたまひ』本傳。我聖人はこゝに初めて、久しく他鄕にありて浮世の辛酸を嘗め盡くせし獨り子の、親の膝下に歸り逢ひしが如く、不思議にも日頃の煩悶全く去りて無我の法悅を感得したまふたのであります。『親鸞に於ては、唯念佛して彌陀に助けられまいらすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり。念佛は誠に淨土に生るゝたねにてや侍るらん、また地獄に落つる業にてや侍るらん、總じ

て以て存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄に墮ちたりとも更に後悔すべからず候』嘆異鈔。あゝ何たる美しき御信仰であらうか、かくて我聖人はたちどころに他力攝生の旨趣を受得し、飽まで凡夫直入の眞心を決定したまふたのであります。

五　入室後の聖人（上）

一たび法然上人の御教化に接したまひし我聖人の胸中には、永劫の常闇全くはれて、無上妙果の月朗かに影を宿し、坦々たる本願の白道は、煩惱の荊棘中にその全相を露現したのであつた。しかも是れ學問、究理の功にもあらず、默想苦行の賚ものにもあらず、宿善開發して本願の名號を聞き、たゞ「よき人の仰せ」のまゝに疑はず、慮らはず、危まず、煩はず、『乘彼願力定得往生』、不思議の誓願はひとへに是れ親鸞一人が爲めなりと仰信なされたのである。さればその領解には聊かも私をまじへず、師資相承して一器の水を一器に移すが如く、法然聖人の領解のまゝをおのが領解となされたのであります。

故聖人のおほせに、源空があらんところへゆかんとおもはるべしと、たしかにうけたまはりしうへは、たとひ地獄なりとも、故聖人のわたらせたまふところへまいるべしとおもふなり（執持鈔）

法然上人またのたまはく。

若し智慧を以て生死を離るべくは、源空何ぞ聖道門を捨てゝ淨土門に赴くべき、當さに知るべし、聖道の修行は、智慧を極めて生死を離れ、淨土門の修

行は、愚痴に還りて極樂に生る（和語燈錄）

我は是れ烏帽子も着けざる男也。十惡の法然房が念佛して往生せんと云ひて居たる也。又愚痴の法然房が念佛して往生せんと云ふ也。安房介と云ふ一文不通の陰陽師が申す念佛と、源空が念佛と、全く替り目なし（同上）

念佛に替り目なきは領解に替りないからである。法然聖人と我聖人の領解に替りなきのみならず、安房介をはじめ、一文不通の私共の領解も、決して替りがない、いや替りのあられやう筈がないのである。かくて法然聖人の門下の人々によりて試みられた、かの信心諍論の一段について、私共は深くその妙旨を味ふことが出來るのであります。

あるとき我聖人、何時もの如く吉水に參りたまふに、折ふし聖信房湛空、勢

觀房源智、念佛房念阿、その外已下の人々多く集まり會して、こゝにはかりなき諍論が起つたのであつた。念佛房申さるゝに「同く淨土を欣ひ、往生を期すと雖も、凡夫の信心は誠少なし、我等何れの時か師範上人の如き信心を得て、疑ひなく、慮りなく、往生を遂ぐべきや」と。そのとき善信上人たゞ一人「聖人の御信心と善信が信心と聊かも變る所あるべからず、唯一也」と申したまへば勢觀房、念佛房、その外の御門侶達、「そは以ての外の事かな、善信房の聖人の御信心と我信心とひとしと申さるゝ事謂れなし、如何でかひとしかるべきや」と善信上人のたまはく、「などかひとしと申さざるべきや、その故は、深智博覽にひとしからんとも申さばこそ、まことにおはけなくもあらめ、往生の信心に至りては、一たび他力信心のことはりを承はりしより以來、全く私なし、然

れば聖人の御信心も他力より給はらせたまふ、善信が信心も他力也、皆共に如來廻向の信心にあらずや、かるが故にひとしくしてかはる所なく全く一つなり」と。

かくて論難決し難き所に、法然聖人、何時になき今日の評論何事にやと、襖をあけて入り來りたまへば、詮方なくその仔細を申し上げけるに、そのとき大師聖人、まさしく仰せられてのたまはく「信心のかはると申すは自力の信にとりての事也。即ち智慧格別なるが故に信また格別也。他力の信心は、善惡の凡夫共に佛のかたより賜はる信心なれば、源空が信心も、善信房の信心も、更にかはる可からず、たゞ一つなり、我が賢くて信ずるにあらず、信心のかはりておはしまさん人々は、我が參らん淨土へはよも參り給はじ、能く〳〵心得らるべき事なりと云々」。何と有難い親切な御裁斷ではありませんか。

これにつけても曇鸞大師の同一念佛無別道故の語、思ひあはされてひとしほ嬉しくいたゞけるのであります。念佛既に同一なるが故に、道また差別なく、道既に差別なければ、手を携へて共に進むべく、よしや一時離るゝことありとも、いつかは長へに共に一處に會ふ期あらんこと、敢て疑ふまじき事であるされど若、領解その道を異にせば、たとひ紫蘭の契り、鴛鴦の睦びも、一たび離れてはまた遇ふこと難く、生を累ね、劫を積みて、なほ相見るの期を失ふことである。されば同一領解の人、同一念佛の行者は、これぞ誠に永劫の同胞、當來の親友、はたまた我聖人の御同朋御同行として、かしづきたまはれる人々の幸福であります。

六　入室後の聖人（中）

信心諍論に就いて、さらに聯想されるのは信行兩座の事迹である。

想ふに當時吉水の禪房は、煩悶者の隱家となり、求道者の中心となり、西より東より、集まり來りて、道を求め、敎を請ふもの數知れず、墨染の袖にあふるゝ法悅をつゝみて、出離生死の要路を語らふ門侶の中には、南北に名を知られし學生達、我聖人の舊知己たる竹林房靜巖、善慧房證空、西仙房心寂、正信房湛空、乘願房空源、信空房證空、聖光房辯長などいへる人々ありて、聖人は料りなきその奇遇を喜ぶと共に、むしろ我身の來りしことの遲きを嘆ち、過ぎし台叡の苦行、磯長の靈告、さては歌の使、六角堂の夢想などゝ心に思ひ

浮びて、今更ながら如來善巧攝化の不思議、廣大無極の師恩に感泣して、身も心も御慈悲に包まれ、抑へんとして抑へ難き慶喜に滿ちたまふたのであつた。しかもこの抑へ難き喜びは溢れて利他の大悲となり、先づ近く同室の好みを結ぶ人々の上に現はされたのであります。

善信上人、あるとき法然聖人に對して申し給はく。「予、難行道を擱て易行道にうつり、聖道門を遁れて淨土門に入りしより以來、芳命をかうふるにあらずよりんば、豈に出離解脫の良因を蓄へん哉、喜の中の悅、なにごとかこれにしかん。しかるに同室の好を結びて、ともに一師の誨をあふぐ輩、これ多しといへども、眞實に報土得生の信心を成じたらんこと、自他おなじくしりがたしかるが故に、且は當來の親友たるほどをもしり、且は浮生の思出ともしはんべ

らんがために、御弟子參集の砌にして、出言つかふまつりて、面々の意趣をも試みんとおもふ所望ありと云々」、そのとき大師聖人のたまはく、「この條もつともしかるべし、すなはち明日人々來臨のとき、おほせられいだすべし」と。かくて我聖人の願ひは直に容れられ、その翌日吉水の大廣間に於いて、信行兩座の會座は開かるゝことになつたのである。

さて御弟子達は何時もの如く、何心なく吉水の禪房に詣でたまふに、なにごとぞ、大師法然聖人は、早や出でて大廣間の上段に着座あらせられ、善信上人は帳と硯とをひかへ、自ら筆を執りて、人々の集り來るを待ち佗びたまふ。しばらくありて内外參集の人々三百餘人、何時もに異なる光景に惟まれつゝ、皆その意を得ざる氣あり。善信上人のたまはく、「今日は信不退、行不退の御座を兩

方にわかたるべきなり、何れの座につきたまふべしとも、各示し給へ」と。時に法印大和尚位聖覺、幷に釋の信空上人法蓮、「信不退の御座に着くべし」と云々。その外三百餘人の門侶、更に一言の述ぶる人なく、滿場寂としてたゞ顏を見合はすのみであつた。

程しもあれ、沙彌法力熊谷直實入道、關東一の剛のものと謠はれし昔の面影は今なほ失せず、遲ればせに馳せ參りて、一座の光景きはだちて訝かしきに、さては由々しき一大事こそ起りたれと、破れるばかりの大音あげ「善信の御房、御房の御執筆そも何事ぞや」と。善信上人宣はく「信不退行不退の座をわけらるゝなり」と。法力房申していはく、「しからば法力もるべからず、信不退の座に參るべし」と云々、仍てこれをかきのせたまふ。

こゝに數百人の門徒、群居すといへど、更に一人の名のり出づるものなし。これ恐らくは自力の迷信に拘りて金剛の眞信に昏きがいたすところか、人みな無音のあひだ、執筆上人親鸞自名をのせたまふ。滿座寂然として聲なく、さらくとかきのせ給ふ筆の音さへきこゆ。やゝしばらくありて、大師聖人おほせられての給はく、「源空も信不退の座につらなり侍るべし」と。そのとき門葉あるひは屈敬の氣をあらはし、あるひは欝悔のいろをふくめり。

私共はこの信行兩座の事迹を承はるごとに、實に言ふにいはれぬ一種の感激にうたれ、悚然として恐れ愼む心が起らずにゐられないのであります。現に法然聖人の御在世に値ひ、親しくその御教化を蒙りながらも、三百餘人の御門弟、まことのお領解をいたゞかれた人は、わづかに五六輩にだにもたらずとは、何たるむづかしいお領解でありましやうか。釋尊の『我れ五濁惡世に於いて、この難事を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切世間の爲めに、この難信の法を說く』阿彌陀經と仰せられたのは、決して事實にはづれた御語ではありませぬ。

蓮如上人の御時、こゝろざしの衆も御前に多く候ふとき、此のうちに信を得たるもの幾たりあるべきぞ、一人か、ふたりか有るべきかなど、御掟さふらふとき、おの〳〵膽をつぶし候ふと申され候ふよしに候（御一代聞書）

「こゝろざしの衆」といへば、普通の人達でなく、深く我身々々の出離の一大事に心がけて、切實に道を求むる人々であつたに違ひない、かゝる熱心なる求道者に對して、「此のうちに信を得たるもの幾たりあるべきぞ、一人か、二人かあるべきか」と仰せられたとすれば、これにつけてもまた如何に眞實のお領解が頂

けがたく、われ心得顔にすましこむことの危險なるがゝ分かるではありませんか、實に膽のつぶれることである。

然るに私共は常に何の造作もなく、心配もなく、御慈悲はたゝいたゝけるものであると思ふてをりますが。なるほど安心といひ、信心といひ、いさゝかも解りにくきお語ではありませぬ。しかるにそれを得るのが何でむづかしいのであらうか。我聖人は『薄地の凡夫底下の群生、淨信獲がたく、極果證しがたきなり。何を以ての故に往相の廻向に由らざるが故に、疑網に纏縛せらるゝに由るが故に』文類聚鈔と仰せられ、またその往相の廻向によらず、疑網に纏縛せらるゝ所以は、私共の邪見、憍慢に基くことをお示しなされました。存覺上人は改邪抄にその意をのべて『大憍慢の妄情をもては、誠にいかでか佛智無上の他力

を受持せんや、以て斯法を信じ難しの御釋いよ〳〵思ひあはせられて嚴重なるかな」と戒められました。私共の恐れ慎むべきは邪見憍慢の心である、自惚の構案である。いさゝかの學問智識をたのみて、不思議の佛智を疑ひ、おのが計らひをまじへて、他力の本願を危ぶむことである。

聖道門の修行には、智慧を究めて生死を離れ、淨土門の安心は、愚痴にかへりて往生を得……凡少の見解をほしゐまゝにして、みだりかはしく佛智の不思議を疑膠すること勿れ、少智は菩提の妨なり、いかに況んや、無智を

や（和語燈錄）

かの吉水門下の人々が、同じく他力本願の謂れを耳にしながら、その領解まち〳〵にして、まことの信心を得られなかつたのは、畢竟兼ねて習ひ修せられた

る自力聖道の機執全く捨たらずして、聖淨二門を混同し、自他二力の區別を誤り、無我の妙域に達せられなかつたからであります。我聖人は之れを嘆きて『末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈みて、淨土の眞證を貶しめ、定散の自心に迷ふて、金剛の眞信に昏し』廣文類と仰せられました。私共は自性唯心とか、定散自力とか、左樣な高尙なる專門の術語は知らないでも、ともかく自分の心をもて御佛の心を推量り、疑ふまじきを疑ひ、計らふまじきを計らひ、つのるまじき自力をつのりつゝあるのであります。しかも表面は念佛の行者らしくまことの信者らしく粧ふてをりますが、これ全く虛僞であり、僞善者である。今、私共が信行兩座の御座につらなつたとして、何れの座に着くものであらうか、無論平生御敎化のお庇で、何等の猶豫もなく、信の座に着くことであらうが、しかし衷心、自ら省みて、我胸の領解は、果して猶豫なく、平氣で信不退の座に着かるゝ覺えがあるであらうか。『御一代聞書』にいはく。

口と身のはたらきとは、似するものなり、心ねがよくなりがたきものなり、涯分、心の方を嗜み申すべきことなり。

またいはく。

慶聞房のいはれ候、信はなくて、まきれまはると、日に〳〵地獄がちかくなるなり、うちみは信不信みえす候。

その見えぬうちみに信行兩座を設けて、つねに我覺悟を試さねばなりませぬ。これをたゞ七百年前に起つた御安心調べだと思ふて了ふのは、實に殘念なことであります。

念に念をいれて聞かねばならぬのは安心の一途、聞いて聞いて聞き拔かねばならぬのは本願のお謂れである。本氣になりで聞きさへすれば、はなれがたき疑情も、除き難き自力の機執も、如來大悲の眞實心に打ちあかされ、いつとはなく金剛不壞の眞實信心になり得ることが出來る。

堅きは石なり、至りてやはらかなるは水なり、水よく石を穿つ、心源もし徹しなば、菩提の覺道何事か成せざらんと云へる古き詞あり、いかに不信なりとも、聽聞を心に入れ申さば、御慈悲にて候あいだ信をうべきなり、たゞ佛法は聽聞にきはまることなりと云々（御一代聞書）

されば私共は「難中之難」ときゝ、「極難信の法」ときゝながらも、決してたじろぎ危ぶむ心があつてはなりませぬ。たゞひたすらに聽聞に心を入るれば、「御慈悲にて候あいだ信をうべきなり」。凡夫の心にて得んと思ふはむかしく、佛より得せしめらるゝはいと易し。「難中之難」とあれば、堅くおこし難き信なれども、佛智より得やすく成就したまふ事なり。往生ほどの一大事。凡夫のはからふべきにあらず』御一代聞書 凡夫のはからひをはなれて、佛智のはからひにまかす、これが卽ち他力回向の眞實信心であります。

七　入室後の聖人（下）

聖人の入室は前後七年に亙りしかど、あの間專ら自行を事として、力を化他に用ゐたまはず。さながら花咲く野邊に憩ひ、洋々たる春波に浮ぶが如く、悠々自適してたゞ偏に佛恩師恩の廣大なるを感荷しつゝ、無事なる日暮をなされ

たのであつた。『慶しいかな、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法界に流す、深く如來の矜哀を知り、良に師敎の恩厚を仰ぐ、慶喜彌至り、至孝彌重し』

廣文類とは、實にその折の御喜びであつたらうと想はれます。

なほ此間の出來事として最も記憶すべきは、聖人の御一生に出格の異彩を放ち、利他敎化の根柢を形造れる、妻帶の御決行であつた。

事のはじめは九條關白兼實公の懇願によりしものにて、兼實公は兼ねて深く法然聖人の敎化を信じ、歸依殊に淺からざりしお方であつたが、あるとき法義聽聞の折柄、聖人に對して「噉肉蓄妻の在家と、持戒清淨の出家とは、必ず往生に大差あらん、然れば上人は持戒清淨の出家なり、我れは無戒不淨の在家なり、出家の念佛と、在家の念佛と、其功德差別あるや」とのお尋ねがあつた。聖人

答へて「彌陀の本願は十方衆生と誓ひたまへり、在家、出家、何の差別か候はん」と。兼實公、重ねてのたまはく「しからば我れ在家の身ながらも、聖人と同じく彌陀の本願に助けられて、順次の往生を遂ぐること、更に疑ふ可らず。この上は、御弟子中に於いて、在家往生の先達となるべき一人を撰びて賜はるべし。之れを我家の女婿として、末代われらと同じき疑ひを懷くものゝ惑ひを解かしめん」と。聖人は直にその願ひを容れられ、仔細あるまじとて、我聖人を召してその旨を傳へられた。聖人は事の頗る重大にして、且つ突差の間なれば、再三堅く之れを辭したまひしかど。しかも嚴命もだし難く、懇なる仰せにたがふべくもあらねば遂に師命に遵ひ、兼實公と御同輿まし〳〵て、五條西洞院の御殿に入らせられ、玉日姫と御結婚なされたのである。時に建仁三年癸

亥、聖人まさに三十一歳姫君は十八歳の御時であつた。

この聖人の妻帯問題に就いては、今日よりして之れを思へば些々たる少事の如きも、我聖人在世の當時に鑑み、また上下二千餘年間、佛教傳通の歴史に徴するに、實に容易ならざる事である。從來、婦人は「惡魔の使」または「夜叉の類」と呼ばれ、「大蛇はみるとも女人はみるな、眼の功德を失ふぞ」とまでに、斥け罵られ、我國に於ても、傳教弘法二大師を始め、女人結界の制を設けて、堅く女人の登山を禁ぜられてあつたのである。されば妻帯などの事は、實に千古の舊慣と、當時の制裁とを打破することであるから、無論、破天荒の行爲、不法の所作と申さねばならぬ。然るに我聖人がかゝる重大なる事件を、いかに恩師の嚴命もだし難しとはいへ、甘んじて之れに應ぜられたのは、實に大膽極まることである。世の中には之れについて、我聖人の墮落を云々するものもあるが、我聖人の御本意は果して何の邊にあつたであらうか。

惟ふに聖人の性格は、持戒嚴肅にして、むしろ清淨潔齋を事とするお方であつたらしい。然るに台叡二十年間の苦心慘憺たる經驗は、我聖人をして、精進潔齋の殆んど無意義にして、持戒苦行のいさゝかも出離の資けとならず、よしその力ありとも末法五濁の根機に相應せざる、上根上機の法なることを自覺せしめられたのであつた。乃ち我聖人は種々の煩悶苦痛を累ねし餘、畢に『まよひやすき難行の小路をすてゝ、易行の大道におもむき』たまふたのである。易行道とは、『信佛因緣願生淨土』、たゞ彌陀の本願を信じて往生の大果を期するの外、持戒も要にあらず、苦行も益なきことである。されば一たび法然聖人の教

を蒙られし我聖人は、戒行の有無や、潔齋精進の勤めなどに、心を煩はし給ふ必要は更に無かつた。世下り、人拙ければ、持戒の教へありとも、堅固に之れを持つものなく、女人結戒の清規あれども、とても之れを維持するの力はなかつたのである。『末法中に於ては、但言教ありて行證なく。若し戒法あらば戒法あるべし、既に戒法なし、何の戒を破るに由りて破戒あらん、破戒なほなし、何ぞ況んや持戒をや。故に大集經に云く、佛涅槃の後、無戒州に滿つ、乃至末法中持戒者あらば、既に是れ怪異なり、市に虎あるが如し、これ誰れか信ずべけん』とは、既に傳教大師が末法燈明記中に證言せられたことである。また西方往生の先達、横川の源信和尚は『往生要集』を著はし、

夫れ往生極樂の教行は、濁世末代の目足なり、道俗貴賤誰れか歸せざるもの

ぞ。但し顯密の教法、其文一に非ず、事理の業因、其行惟れ多し、利智精進の人は、未だ難しと爲さず。予が如き頑魯の者、豈に敢てせんや」、

と宣明なされた。我聖人は此等の指導により、法然聖人の教化を蒙むりて、自ら無戒名字の比丘と名のり、末世凡夫の行狀に示同なされたのである。妻帶の一事を以て、我聖人の性格を評隲せんとするは、實に皮相の見といはねばなりませぬ。

然らば聖人は、たゞ當時の頽敗せる僧侶の風紀にならひ、凡夫往生の教義に基づきて、妻帶なされたであらうか。無論當時の佛教は廢頽して、僧侶の風紀は紊亂してゐたに相違ない。されど、公然妻妾を擁して五辛腥肉を食ふまでには墮落してゐなかつたのである。されば聖人の妻帶に就いては、內心は兎も角その表面は必ず他の攻擊を被り、誹謗を招きて、强壓なる周圍の制裁を免るゝ

ことは出來なかつたであらう。また二十年來、聖道自力の風儀を習ひ、持戒清淨を以て佛弟子の正しき行狀と思惟されし我聖人が、辭退して聞かれなかつたとて、餘義なく妻帶せらるゝといふは、まことに意志の薄弱にして、むしろ丈夫の恥辱とするところである。また如何に淨土眞宗が凡夫往生を旨とする教義であつたとしても、たゞ持戒清淨の必要なしとするまでゝ、敢てその行狀を輕んずるわけはないのである。されば何の必要ありて聖人は好んで妻帶なされたであらうか。よし好んでなされずとも、何故に飽くまで師命を峻拒されなかつたであらうか。

これに就いて、私共は我聖人が、如何に堅固なる信仰を有し、美しき犧牲的精神を具へたまひしかを知らねばなりませぬ。我聖人が吉水入室以來は、ひたすらに法然上人を師父と仰ぎて、何事もその仰せのまゝに、身も心も捧げて、

他意を存せられなかつたのである。『親鸞におきては、唯念佛して、彌陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せを蒙りて、信ずるほかに、別の仔細なきなり』、『法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからず候』。これは出離得脫に就いての御語であるが、既に出離ほどの一大事、年來苦心を累ねたる生死の大問題でさへ、師の仰せのまゝにまかせて疑ひたまはざる御身には、通常生活のかりそめごとに至つては、萬事萬端、師命のまゝを實行なされたことであらう、何と敬虔なる御信仰ではありませんか。この信仰を以て師命に對すれば、よしや火水の中でも、仰せとあれば、直に身を投せられたに違ひない。現に『地獄に落ちたりとも後悔すべからず』と自白な

されてある。況んや、この度の師命は、かりそめならぬ衆生濟度の爲めである末代凡夫の疑ひを霽さん爲めである。妻帶の事が、たとひ佛法の通規に背き、古來の舊慣を破り、世を擧げて攻擊の衝點となり、謗難の標的となるとも、我聖人は喜んでその犧牲となられたことでありましやう。また既に我聖人は、浮世の毀譽褒貶については、飽くまでその是非を咬みわけ、一としてその賴み難きを自覺なされてある。出離生死の爲めには、門跡も、紫衣も、名譽も、權勢も、あらゆる地上一切のものを拋ちて顧みられなかつたのである。しかも今や出離の望み足りて、胸中たゞ如來の御慈悲に滿たされ、浮世の是非はその影だも留めないのである。明け暮れ感謝の情溢れて、大悲矜哀の心湧くが如く、聖人の一身は慈悲につゝまれ、慈悲に動き、慈悲に支配せられつゝあつたのである。

衆生の爲めの妻帶、化他の爲めの結婚、この慈悲一たび動いて、斷乎たる決心は、直にそこに起るべき筈である。まして生命を捨つるとも、違ふまじと思ひ定めし師の嚴命あり、聖人の胸中、どうして世の紛々たる是非を顧みるの遑があらうか。言換ふれば我聖人は師命を奉じ、末世凡夫の犧牲となりて、世評の中心に、御身をたてられたのであらう。その高潔なる犧牲的精神、むしろ感激するより外はないのであります。

なほ進んで聖人の妻帶なされし決心の奥底を窺ふに、その心の奥には慥に動すべからざる信仰、更にその信仰を實現さすべき力强き根據を有せられてゐたのに違ひない。それは建仁三年四月五日夜の夢想、『行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴臨終引導生極樂』の偈意について、如來の使命を感得

せられたからでもあらうが。私共は更に聖人の平生に於ける理想について之れを考察して見やうと思ふ。蓋、聖人の理想としては、眞諦は法然聖人により俗諦は聖德太子によらるゝお思召があつたやうである。しかも法然聖人は勢至菩薩の化現、聖德太子は觀音薩埵の權化と確信し、殊の外崇敬を拂はれてあつたことは、『源空勢至と示現し、あるひは彌陀と顯現す』。『救世觀音大菩薩、聖德皇と示現して』等の和讃について知ることが出來る。本傳にその意を承けて『大師聖人、すなはち勢至の化身、太子又觀音の垂迹なり、この故にわれ二菩薩の引導に順じて、如來の本願をひろむるにあり、眞宗これによつて興じ念佛これによりて煽んなり。是れ併乍ら聖者の敎誨によつて、さらに愚昧の今案をかへず』と記されてあります。これが卽ち我聖人、淨土眞宗を弘通したまふ理想で

あつて、その理想のまゝ、その指導のまゝにまかせて、いさゝか私をまじへたまはなかつたのであります。さて眞諦の理想たる法然聖人については、今更言ふを須ゐず。俗諦の理想的人物たる聖德太子は、我國に於ける佛敎弘通の大恩人である。故に我聖人は『和國の敎主聖德皇、廣大恩德謝しがたし』『上宮皇子方便し、和國の有情をあはれみて、如來の悲願を弘宣せり』和讃と讃嘆なされ、つねにその恩德を感謝なされてあつたのであります。然るに聖德太子は、一方には盛んに佛法を弘通しながら、他の一方には推古天皇の皇太子として政治を扶け、殊に十七憲法を制定して、眞俗相資の旨を示したまひしお方である、その行狀、毫も俗人に異ならずして、その爲したまふところは、三寶の興隆なり、佛敎の弘通なり、卽ち眞俗二諦を一身に實現して、非僧非俗の範を垂れた

まふのであります。我聖人の妻子を蓄へ、腥肉を食ふて、在家往生の先達をなされたのは、實にその聖德太子の御行狀に倣はせられたのであらう。『更に愚昧の今案を加へず』とは、卽ちこの事である。されば法然聖人の嚴命により、九條兼實公の懇望に應ぜられたのは、決して私事でなく、大法弘通の方便である、しかもその決心の根據はまさしく和國の敎主聖德皇である。以上を綜合して聖人當時の御精神を探つたら、心意の高潔にして、一點卑猥の情なかりしことは、大方承知さるゝことであらうと思はれます。

次に私共は聖人の家庭について大なる敎訓が得らるゝのであります。そもそも婚禮は人間一生の大事として、生涯の幸不幸は概ね配遇の良否によりて岐るゝものである。夫婦の和合せざるは、一家滅亡の基たるは言ふまでもなく、

その雙方にうくる精神上の不愉快は、實に酷しいものである。たとひ夫婦の間睦まじく、琴瑟相和する家庭にあつても、人間の感情は或る場合に於いて必ず多少の衝突を起すことである。もしまたその感情は常に調和せられて、一家たゞ洋々たる春風につゝまるゝも、人爲以上の惡魔によりて倏ちにその和樂を攪亂せられ、溫かなる愛情を裂き取らるゝことがある。洋々たる春風の裡にはやや寂寞たる秋風の吹きわたることを認めねばならぬ。されば婚姻によりて、二個の愛の完全に結びつけらるゝは、人間一生の幸福たるには相違なきも、私共は更にその幸福を永久に維持する、より大なる幸福を求めねばならぬ。而してそは卽ち如來を信じ、眞理に婚嫁するによりて得らるゝのであります。眞理は不生不滅である、如來は不生不滅の眞理よりあらはれてその眞理を證れる覺

者である。この如來を信ずるは卽ち眞理に嫁するのである。眞理に嫁するものは不生不滅の生命を得るものである。惡魔は婚姻によりて結ばれし二個の愛を裂くことがあらう、されど我等と眞理との愛を裂くの力はない。更にいふ、眞理は卽ち如來なり、如來の愛は恒久不變にして、眞理の如く不生不滅なり。如來の神聖なる愛を感得する夫は、よくその妻を愛して長へに變せざるべく、如來を信ずる妻は、またよく夫に事へて從順貞節を全ふすべし。かくして、二個の愛は永久に結ばれて變ずることなく、たとひこの世の緣にし薄くして、互ひに相別るゝことありとも、その靈はともに如來の國に迎へられ、ともに盡きぬ偕樂を享くることが出來る、これぞ卽ち佛敎の理想的家庭である、神聖なる愛を永遠に保つの法である。しかして我聖人の家庭は、よくこの理想を實現し、

その夫婦間に於いて、最も著るしくこの神聖なる愛を發揮せられたのであります。

玉日姫の事迹に關しては、種々の傳說もありて、一々之れを辯明するの遑はない。されど夫婦のなか、つねに睦まじく、聖人關東御流罪の後も、三好爲敎の娘子として聖人の御迹を慕ひ、聖人を扶けて、ともに大法弘通に力を盡くされしことは明かなる事實である。その互ひに相信ずること厚く、一道の靈感たえず雙方の御胸に通ふてゐたことは、ほゞ之れを想像することが出來るのである。傳記によれば、我聖人は玉日姫を觀音の化身として、眞宗弘通を扶ける爲めに、かりに緣を結ばれたと思ひ、玉日姫もまた我聖人を佛の應化なりと信せられてあつたやうに思はれる。『口傳抄』には、玉日姫からその娘子覺信尼に贈ら

れた手紙に、先夜夢を見たが親鸞聖人は觀音の化身である、卽ち自分の夫たるそなたの父親は佛の化現である、その心で謹んでお仕へ申さねばならぬとの意が記されてある。かくの如く夫婦間の情合、世間普通と異なりて、ともく〳〵に淨土眞宗を弘通なされ、聖人が稻田を去りて上京なされた時も、御自分は片鄙に蹈みとゞまつて、生涯を善男善女の化導に送られたほどである。その貞節なるお心掛けはひたすら感じいる外はない。我等聖人の遺弟たり、門徒たるものは偏に聖人の信仰的家庭を理想とし、御佛の慈悲を仰ぎて、眞正にして永久變らざる和樂を求めねばならぬことである。思ふに聖人御夫婦の靈は、またまさに我等が家庭の狀態をつねにみそなはしたまふことでありましやう。

世に惠信尼卽ち玉日姫の御遺言として傳らるゝ法語がある。

我身こと、前日より何とやらん心あしく候。病は死のたよりに候へばひとしほお慈悲の程たのもしく候、定めて身の終りと存じかたみの爲に書き殘し候。誠に凡夫の習なれば、憂きこと多く候べし。斯る身なればこそ此身一人の往生をかけものになされ、正覺ならせ給へる如來の御相こそ、吾等の往生の疑なきしるしにおはしまし候へ。必ず〳〵御過ちあるまじく候。惡しき心が起り候へば、いよ〳〵たつとみ稱名いさみ給ふべく候。之より外は身の喜びこれなく候。親鸞の仰せも外の事は候はず、唯御恩を喜ぶばかりに候。別に珍らしきこと候はゞ、悲しき御別れと存候御信心に變りなき人は淨土にて、はちすの對面申すべく候かしく云々。

何たる美事なるお領解でありましやうか。これでこそ我聖人の正意を解し、御化導を助けられた御精神のほどが料り知らるゝのである。我淨土眞宗にお流れを汲まるゝ婦人は、よく此御遺訓を熟讀し、玉日姫の御行狀に倣ふて、自行化他の務めに盡瘁されたきことである。

八　吉水の迫害

特留此經の要法、時機相應の念佛、火の枯野を燒き、風の草木を靡かすに似て、遠近朝野の別なく、貴賤上下の隔てなく、道俗相胥いて吉水に集まり、念佛の敎を承くるもの數知れず。『農夫の鍬をふむ、念佛を以て田歌とし。織女が糸をひく、念佛を以てたてぬきとす。鈴を鳴らす驛路には、念佛を唱へて鳥を取り、船ばたをたゝく海上には、念佛を唱へて魚をつる。雪月花を見る人は、西樓に目をかけ、琴詩酒をもてあそぶともがらは、西の枝の梨を折る』勅修傳今や法然聖人の名聲は、念佛弘通の噂さと共に、嘖々として遍く都鄙の間に傳へられたのである。

然るに「叢林茂らんと欲して、秋風之れを破る」の語、空しからず。南都北嶺の妬み甚しくて、洛北勝林院に於ける大原談義を始めとし、明慧上人の摧邪輪となり、解脫上人の彈劾表となり。其間相ついで、禁廷及び月輪殿上に、彼我の小衝突は試みられ。比叡の大衆は念佛停止の訴を起し、迫害諸所に現はれて、吉水に對する四方の壓迫は、其繁榮と共に、日に月に其度を高め來たつた。しかも法然聖人は、常に自ら抑損して、門下の反抗を誡め、謙讓たぐひなき辭を以て誓詞を出し、七ケ條の起請をなしたまびしも、たまたま御鳥羽上皇の寵妃、松虫、鈴虫の黑髮剃り落して、紀伊の山奥に其姿を隱すことゝなり。南都北嶺の讒訴は上皇の逆鱗と化し、ついで住蓮、安樂の殉敎となつたのであ
る。

時に住蓮は江州馬淵に在りしが、松虫、鈴虫の出家によりて疑ひ吉水聖人にかゝり、念佛停止の噂さ隱れなしときゝ、師の房の御身心元なしとて、空を馳せて驅け上り、直ちに西八條の評定所に名乘りいで、安樂もまた之れをきゝて自訴の途すがら、陽明門前の制札に涙を流し、「若し罪あらば我等にこそあれ、念佛に何の咎めかある。いかに勅命とは申しながら、念佛禁止とは何事ぞ」と無念のあまり、我れを忘れて聲高く「輪王位高けれども、七寶久しく止まらず天上樂み多けれど、五衰早くぞ現じける、南無阿彌陀佛〳〵」と、高聲念佛しければ、遂に評議の末、住蓮安樂は、二人の官女を出家せしめ、剩さへ念佛停止の禁制を破りたる咎により死刑に處せらるゝことゝなつた。安樂死にのぞみて、法然聖人に贈りし書に、

まれに人界に生をうくるは、終に遁れぬ死出の途に候へば、今法の爲めに身を捨て候こそ、果報目出度存候。極惡の身たりとも他力に乘じて極樂に參ると思へば、露ばかりも命は惜からず候。

また辭世の歌一首

極樂に參らんことの嬉しさに
身をば佛にまかせけるかな

住蓮また刑に就かんとして

この頃のかくし念佛のあらはれて
からめとられん彌陀の淨土に

かくて二人の殉教者は、高聲念佛數百遍、たなびく紫雲に乘じて、むなしく西の空の人となつてしまふた。

九　聖人の流罪

『罪惡生死のたぐひ、愚痴暗鈍のともがら、しかしながら上人の化導により て、ひとへに彌陀の本願をたのむところに、天魔やきをひけん、安樂死刑にを よびてのちも、逆鱗なほやまずして、かさねて弟子のとがを師匠にをよぼされ度緣をめし、俗名をくだされて、遠流の科にさだめらる』勅修傳。時に建永二年二月二十八日。法然聖人御年七十五、我聖人まさに三十五歳の御時であつた。『顯化身土文類』の六にいはく『主上臣下、法に背き、義に違し、忿を成し、怨を結ぶ。茲に因りて、眞宗興隆太祖、源空法師、幷に門徒數輩、罪科を考へず、猥りがはしく死罪に坐す。或は僧儀を改め、姓名を賜つて、遠流に處す、予は其

一也。爾れば既に僧に非ず、俗に非ず此故に禿の字を以て姓と爲す。空師幷に弟子等、諸方の邊州に坐して五年の居緒を經たり』。こは是れ我が聖人の後年手記したまひしところである。『空聖人、罪名藤井元彦、配所、土佐國幡多。我が聖人、罪名、藤井善信、配所、越後國國府』

かくて法然聖人は、しばし吉水を出でゝ、阿彌陀峰の麓なる小松谷の草庵に移りたまふことゝなつた。御門弟の人々は、たゞ打寄りて聖人の罪なくして流刑に處せられたまふを歎げきあへる中にも、法蓮房申さるゝやう、「いかに一向專修興行のためとはいへ、老邁の御身、遼遠の海波におもむきましまさば、御命よもや安からじ、されば我等再び恩顏を拜し、嚴旨をうけ給はるべき期なからん。まして師匠流刑の罪にふしたまはゞ、のこりとゞまる門弟、また何の面目

あらんや。然りと雖も勅命曲ぐべからず、表面一向専修の興行をとゞむべきよしを奏したまひて、内々御化導あるべくや待らん」と。一座の門弟おほくこの義に同じけるに、聖人のたまはく『流刑さらにうらみとすべからず。われ齢既に八旬にせまりたれば、たとひ師弟同じ都に住はんも、娑婆の離別近きにあるべし。たとひ山海をへだつとも、浄土の再會なんぞうたがはん。また厭ふと雖も、存するは人の身なり、をしむと雖も、死するは人のいのちなり、なんぞ必ずしもところによらんや。しかのみならず、念佛の興行、洛陽にして年ひさし邊鄙におもむきて、田夫野人をすゝめんこと、年來の本意なり。しかれども時いたらずして、素意いまだ果たさゞりしに、いま事の縁によりて、年來の本意を遂げんこと、すこぶる朝恩ともいふべし。此法の弘通は、人とゞめんとすと

も、法さらにとどまるべからず。凡そ驛路はこれ大聖のゆく所にして、謫居はまた權化のすむ所なり。即ち漢家には一行阿闍梨、日域には役優婆塞、また震旦には白樂天、吾朝には菅丞相。われ今さしたる權者にはあらねど、弘通する所の念佛は、正しく大聖出世の本懐、恒沙諸佛の證誠、冥衆護持の約またねんごろなり、いかんぞ世間の機嫌を憚りて、經釋の素意をかろんじ、身命ををしみて流刑を恐れんや。ただ痛ましきは、常隨守護の神祇冥道、さだめて無道の障難をとがめ給はんか。命あらんともがら、因果のむなしからざる事をおもひあはすべし。因縁つきずば、いかでかまた、今生の再會なかるべきや』と。

また或時一人の弟子に對して、一向専念の義をのべ給ふに、御弟子西阿彌陀佛推參して。「かくのごとくの御義ゆめ〳〵有るべからず、おの〳〵御返事を申給ふ

べからず」と申しければ、聖人のたまはく「汝、經釋の文を見ずや」と。西阿かさねて申さく、「經釋の文はしかりといへども、世間の機嫌を存するばかりなり」と、聖人聲を勵ましてのたまはく「われたとひ死刑に行はるとも、この事いはずばあるべからず」と至誠の色頗ぶる切にして、威容森嚴侵すべからず。一座の人々顔を見合せて涙に咽びけりと。

あゝ聖人、身に覺へし罪なきに、配竄の厄難をうけ、しかも却つて「是れ邊鄙化導の素懷を遂ぐべき便りなり」と喜び。また「念佛弘通の爲めには、たとひ死刑に行はるゝも、この事いはずんばあるべからず」と、切言したまふところその意氣の壯烈にして、悲心やみ難き聖人の恩容、さながら面のあたり拜してまつるが如く。また之れを我聖人の『大師聖人源空もし、流刑に處せられた

まはずば、われまた配所におもむかんや。もしわれ配所におもむかずんば何によつてか邊鄙の群類を化せん。是れなほ師教の恩致なり』本傳。即ち我が二十餘年間の關東行化は、偏に師匠法然上人のお庇なりと流刑に處せられながらも、天を怨みず、人を咎めず、却つて師恩の廣大なるを喜びたまへるに思ひあはせて、今更ながら兩聖人の襟懷海の如く、大悲弘法の精神、相符合して、師資その轍を一にするに驚嘆せざるを得ないのである。我等宿福多幸にして、兩聖人の遺敎を奉じ、時機相應の要法に遇ひながらも、徒らに自讃毀他の邪執に着して、他を容るゝの雅懷なく、不法懈怠にして、自身安逸の計を運らすのみなるこそ、實に兩聖人に對したてまつりて、愧かしき次第であります。

なほ傳ふべきは、兩聖人のお別れである。我聖人は最後の訣れを惜まんが爲

めに、法然聖人を小松谷の庵室に訪づれたまひ、つく〳〵聖人の御顔ばせを見たまひて、「さても我れ天台の門跡を捨てゝこの眞門に入りしより以來、七年の春秋を送り、遲々たるおそき日、更々たるながき夜も、常隨昵近し奉り、現には鶴林の夕を送り、當には各留半座の曉を期せんとこそ思ひつるに、今宵限りの身となりて、師は西海の浪に漂ひたまひ、我れは北陸の雲に迷はんこと、前生いかなる薄緣ぞや。

會者定離かれてありとはきゝしかど
昨日今日とは思はざりしを

今、訣れ奉らば、またいつの世にかは逢ひ奉るべき」とて、紅涙に咽び給へば、空聖人も涙にくれさせたまひ、「汝は北國、我れは西海、明日をも知らぬ

老の身の、再會いつと定むべき。

別れ行く路は遙にへだつれど
宿りは同じ華のうてなぞ

唯何事も淨土にてこそ」と仰せられて、御涙のはら〳〵と落つるを袂にとゞめかねたまへば、我聖人も血涙をおさへて別れを告げ、時しも承元元年三月十六日、法然聖人と同じ日、しかも師聖人の御離京を聞くに堪へずとて、同日卯の一點、三時ばかり先きだちて都を出でたまふた。まことに思ひやるさへお痛はしいかぎりである。

一〇　流罪後の聖人（上）

吉水の法難は、我聖人をして利他の大行を成就せしむる如來の善巧方便であつた。弘法の因内に萌し、利生の縁外に催して、出家得度したまひし、我聖人をして、年來の宿懐を遂げしむる好機縁であつた。『われもし配處におもむかずんば、なにゝよりてか邊鄙の群類を化せん、是れなほ師敎の恩致なり』と、喜び勇みて配處に旅だちたまひし、聖人の胸中、實に綽々として餘裕ありといはんより、寧ろ希望と勇氣とに盈ち溢れて、一道の光明赫々として、その前程を照し導いたことゝ思はれる。

征路悠々二百餘里、大津打出の濱より乘輿を返へし、蓮位、西佛、正全房の

人々を從へたまひ、越前有乳の險に行き惱み、鋸坂を越え、加賀より越中に出で、眞言の古刹に慧明院を化度し、三日市に辻源左衞門夫婦を度し、三本柿にて奇蹟を示し、道を倍して越後の境に入り、駒がへりの難所にて大文字屋右近夫婦と別れ、小野の浦より船に乘じて小田の濱にあがり、かくて配所越後の國、國府萩原民部少輔年景が許に着かせたまふ。

民部少輔年景は、始めの程は尊き聖人とも知らず、唯尋常の流人の如く心得て、我聖人をいぶせき藁屋のうちに置き參らせしかば、風吹き荒むときは蔦屋の壁落ち破れ、雨烈しきときは屋漏りて身を置くに所なき程なりしも、聖人、更に憂しとも思ひたまはず、朝暮の勤行いと懇に、隨從の弟子への御敎化、日夜怠りなく、年景はその尊き行化に、いつしか渴仰の思ひふかく、乃ち翌年

四月四日國分寺の東南平岡といへる所に御庵室を造りて聖人を移し參らせ、また烏屋野といへる所にも御庵室を營みて、こゝに聖人を迎へ奉ることゝなつた。爾來、男と云はず、女と云はず、その教化を蒙るもの、日に月に夥しく謫居五年、我聖人の化益は、あまねく北越一帶の地をして、甘露の法雨に浴せしむることになつたのである。

年去り、年來りて、建暦も早や二年となれり。是より先き、建暦元年、岡崎中納言範光卿を使者として、流罪赦免の宣旨あり、されど越路雪甚だ深くして人迹絶え、且つは師範聖人の御歸洛を待ち佗び給ひしため、上洛なかりしが、師聖人には、去ぬる建仁二年三月、讃岐國鹽飽の地頭高階時遠入道西仁が館に入り、後、小松正福寺に移り、承元元年十二月八日大赦、途すがら暫く攝津の神

部に留まり、同三年八月、勝尾寺の西谷に移らせ給ひ、建暦元年十一月仲旬宣旨によりて歸洛、再び洛東大谷の禪房に入らせ給ふ。されば我聖人は一日も早く上洛して、まのあたり恩顔をも拜し、御教にも接して、聊か遺る瀨なき師德の萬一を報ゆべしと。雪漸く晴れて、旅人の跡をとゝむるに便りある二年三月、輙かに國府の配處を立ち出でゝ歸洛の途に就き給ふ。春なほ淺き北陸の野邊を埋むる宿雪に、ゆく手は迷ふ斷雲の、飛びかふ影か雪風吹、心急げど脚重く、我聖人は信濃路より上野に出で、同國四辻といふ所に到り、初めて師聖人には正月上旬より御異例にて、同二十五日遂に御往生の訃音に接し給ひ、張り詰めし鐵石の心も忽ち弱り、慟哭悶絶、道衢に倒れ伏して血涙に咽び、『嗟呼悲哉、生滅の有樣、聖人三明の月、早くも鶴林の影となり、楞嚴の流れを

傳ふ吉水の筧も淡となり、淡路島、法の篝火影くらく、煙と共に、今月二十五日、遂に往生を遂げ給ふ』。我聖人は、今は早や京に歸りたりとて何かはせん、しかず關東に蹈み止りて念佛の大法を傳へ、佛恩師恩を酬ゆべし、などて徒らに一期の別離を哀みて愁嘆の涙に咽ぶの時ならんや、契りあらば、今にも知れず師の後に繼ぐべきぞ、京に歸るも詮なしとて、涙を呑みて、もと來し路を辿り、上野信濃地に教を施し給ふ。

かくて遠近の道俗、聖人の歸行を聞き傳へて、阡陌に遮り、街衢に充ちて、化を仰ぎ、教を聞くもの數しれず。同年五月中旬越後頸城郡栃崎の里にて、日まさに晩隱に及び、折ふし梅雨車軸を流し、聖人其里の富豪小畠左衞門の門前に雨宿りし給ふ。さるうちに日も既に昏れければ、聖人、自ら一宿を求められし

に、主人慳貪にして借し奉らず。聖人已むなく夜半まで門下にまし〳〵て、稱名高らかに唱へ給へり。其聲殊勝にして戸の隙を洩てきこえけるに、石木ならぬ主人は、さすがに心動き、聖人を内に請じ奉れり、聖人思召けるは、邊鄙の群類、煩惱の重病、診治疹へ難しといへども、法身の惠命、何ぞ殫きたりと云はん、十方の誓ひ、あに是の人を漏さんやとて、終夜教化したまひしに、左衞門夫婦、共に深く信心にもとづき、歡喜の人と爲れり。聖人たはぶれに左の一首を扇にしたため、其家に殘したまへり。

かき崎にしぶ〳〵宿をかりけるに
主のこゝろ熟柿とぞなる

一一　流罪後の聖人（中）

『聖人越後の國より常陸の國に越えて、笠間郡稲田郷といふ所に草庵を構へ、隠居し給ふ。「幽栖を占むといへども、道俗跡をたづね、蓬戸を閉すといへども、貴賤衢に溢る』本傳。聖人の德澤、既に遍ねくして邊鄙の群類を潤し、佛法弘通の本懐こゝに成就し、衆生利益の宿念たちまちに滿足す。聖人の喜びはまさに如何あつたであらうか。

然るに茲に播磨公辨圓といへる聖護院下の修驗者あり、日來聖人の教化四方に普く、衆徒の歸依日に厚きを見て、頗る嫉妬の情に堪へず、遂に聖人を殺害せんとの惡心を起し、同業小山寺、吉祥坊等三十五名の修驗者をかたらひ、板

敷山にしのびて、より〳〵聖人を要擊せんと恐ろしき逞みを企てた。板敷山は稲田と鹿島行方との通路に當り、聖人は往復常に路を此に取り給ふたのであるされど茲に不思議なるは、聖人往還の途次、念佛の聲山上に聞ゆと思ひ峰に登れば、我聖人、山下を通り給ひ、また時に聲、山下に響きて馳せ降れば、聖人山上を過ぎ給ふ、數々待合すと雖も、常に其機を逸して望みを果す能はず。依りて更に効驗を自家の祕法に求めんとて、不動明王の像を板敷山上に勸請し、北麓の禪室に護摩壇を築きて、三日三夜の懇禱を凝した。しかも何等の効驗もなければ、今は瞋火腸を焦し、怨熱骨に徹し、神か鬼か、はた何物ぞ、日頃の鬱憤いかで晴さで措くべきぞと、單身稲田の庵室に至りて、聖人に謁を請ひけるに、弟子の方々は、その形裝の異常なると、兼ねてより辨圓の噂もきゝね

たれば、何れも恐惶を懐きけるが、我聖人は何等の雑作もなく、離衣素服のまゝ、左右なく出逢ひ給ふたのである。辨圓すなはち尊顔に向ひ奉つるに、不思議や害心たちまちに消滅して、あまつさへ後悔の涙禁じ難く、庭上にひれ伏して、ありのまゝに日來の宿願を語るに、聖人さらに驚ける色なく、『誠に今日は能き弟子を得ることあらんと思ひつるに、果して御房こそ來られけるよ』とのたまへば、辨圓思へらく、「是れぞ生身の如來なり」と、立地に弓矢を折り、刀杖を捨て、頭巾をとり、柿衣を改めて、我聖人の弟子となつた。明法房證信すなはち是れである。

あだとなりし弓矢もいまは引かへて
西へいるさの山の端の月

その後、辨圓幾度か我聖人に供奉して板敷山を往返しけるとき、昔を偲び、今を思ひ、感慨殊に深かりけむ、

山も山道も昔しにかはられど
かはりはてたる我心かな

と口占みたりしと。明法房は聖人御歸洛の後も、關東に留まりて、生涯聖人の教をまもり、聖人の入滅に先きだつこと十一年、目出度往生の素懐を遂げしといふ、時に年六十八であつた。

明法房辨圓のことに就いては、私共は何時も其話を聞くごとに、三通の教訓が含まれてゐるやうに思はるゝのであります。一には、如來の御胸の廣大なることにて、善導大師は大心海と説き、我聖人は大悲大願の海水と讃嘆なされ

てある。

盡十方無礙光の　　大悲大願の海水に
煩惱の衆流歸しぬれば　　智慧のうしほに一味なり
名號不思議の海水は　　逆謗の屍骸もとゞまらず
衆惡の萬川歸しぬれば　　功德のうしほに一味なり（和讃）

既に明法房は逆謗の咎をいだきながら、たちどころに改悔懺悔して、盡十方無礙の光耀に攝取せられ、名號不思議の大海に歸入したのである。されば私共は決して己が罪障の深きに心懊き、身を責めて、佛願の不思議を疑ふてはなりませぬ。

また二つには本願を信ずる後の心得にて、かの一たび佛願を信じたる明法房

は、流水の海に入りて、うしほに一味なるが如く、終生我聖人の敎によりて、如來の大悲を味ひ、我れも人も同じく平等大悲の一味をあじはふことに努力したのである。其敬虔なる信仰と、堅固なる道德とは、敢て暴惡邪見なる昔しの面影を留めなかつたのである。其形のみならず、心の底までが、如來の大悲に同化されて了ふたのである。卽ち明法房は當時關東の同行の模範たりしのみならず、また私共の模範であります。明法房の如き惡人でさへ、如來の大悲に漏れなかつたのであるから、いさゝかの罪惡ぐらゐは愼むに及ばぬなどゝ思ふやうなことがあつたら、實に甚しき間違である。『明法房などの往生して、おはしますも、もとは不可思議のひがごとを、おもひなんどしたるこゝろをも、ひるがへしなんどしてこそ、さふらひしが、われ往生すべければとて、すまじ

きことをもし、おもふまじきことをもおもひ、いふまじきことをもいひなどすることは、あるべくも候はず。乃至明法御房の往生のことをきゝながら、あとをおろかにせんひとゞはその同朋にあらず候べし云々』とは、我聖人が明法房の往生によせて關東の同行を戒めなされた御消息中のお語である。私共は能くこのお語により、明法房の事跡に省みて、我行狀をつゝしまねばならぬことであります。

以上の二箇條は妙法房に就いての教訓であるが、第三は妙法房に對する我聖人の態度によりて得らるゝ教訓であります。我聖人は無論、如來の化身、權化の再來として、決して私共と同樣に見傲すことは出來ない、いな假りに思ひ較ぶるさへ恐れ多き事である。しかし聖人は、つねに私共を御同朋御同行と

呼び。『親鸞さらにめづらしき法をもひろめず、何をおしへて弟子といはんや』と仰せられた。齊しく如來の教を信じ、本願の大海に歸入するものは、凡聖善惡の隔てなく、同一味のうしほになるのである。既に一味といへば、一切の差別の無くなつたことである。しかしこれは決して私共の面容や智慧や道德などについて申すことではなく、大悲廻向の信心を領したる上の咄である。信心は自力ならぬ他力廻向の法であるから、我聖人の御信心も、私共の信心も、同じく他力である。『信心とはまことのこゝろとよめるなり、まことの心とよむうへは、凡夫自力の迷心にあらず、またくこれ佛心なり』最要鈔。佛心を全領するが卽ち信心である。そこで信心は自他平等無差別といふことができる。私共はこの同一無差別の信心を領するが故に、我聖人と同じく、順次の往生を遂

ぐることが出來るのである。されば信心の上に於いては私共はまさしく我聖人の御同朋御同行といはるべき光榮を荷ふのであります。

信心よろこぶそのひとを　如來とひとしとときたまふ
大信心は佛性なり　佛性すなはち如來なり
他力の信心うるひとを　うやまひおほきによろこべば
すなはちわが親友ぞと　教主世尊はほめたまふ（和讃）

あゝ、さても何たる幸福でありましやうか。私共はかゝる光榮を思ふにつけ、冥加にあまりて何とも箇とも言ひ得られない心地がされるのである。『すがたかたちは昔のまゝよ、かはりはてたはわがこゝろ』。私共の形相も情性も能力も、更に以前に變はりしところはなけれど、たゞ罪の子が如來の子となり、

悲しかりし未來が樂しくなつたのは、非常な大變りではありませんか。

超世の悲願をきゝしより　われらは生死の凡夫かは
有漏の穢身はかはられど　心は淨土に住みあそぶ（和讃）

即ち有漏の穢れはてた凡夫が、たちまち淨土に住みあそぶ聖者になつたのは此上もなき心靈上の大革命である。この大革命の標相は直に我等の身上に表現するものならねど、しかし幾分かその相の見えぬことはないのである。

信心治定の人は、誰によらず、まづ見ればすなはちたふとくなり候。是はその人のたふときにあらず佛智をえらゝが故なれば、いよ〳〵佛智のありがたきほどを存ずべきなり。（御一代聞書）

金剛石は塵垢の裡にありながら、光輝自ら外にあらはれ、他力廻向の佛智は煩惱の塵垢に包まれながらも、その光輝は自ら獲信者の三業にあらはるゝ、

「まづみればたふとくなる」とは卽ちそれである。我聖人はその信德を圓かに實現されたお方で、佛智、聖人に宿りて、その人格を化成したのである。卽ち我聖人の身には、常に佛の慈悲と智慧とがあらはれて、不思議の感化力が具はつてゐたのである。明法房が一たび尊顏を拜して、害心たちまちに消滅し、渴仰の思ひ禁じ得なかつたのは、その不思議の靈感に打たれたからである。それにつけても私共は、敢て聖人とひとしい人格を具ふるまでに進むことは到底思ひ料られぬことであらう。しかし塵垢に包まるゝ金剛石は、塵垢を除き去ることによりてその光輝をあらはし、煩惱に包まるゝ佛智廻向の信心は、煩惱を薄らぐることによりて、その德用をあらはすべき道理であるから、私共は煩惱を全く除き去る力はなくとも、しかも幾分か薄らぐることは出來得る筈である

せめて「先づ見ればたふとなる」といふくらゐには、進まれやうかと思はるゝのである。これが卽ち俗諦上の修養でありて、修養の功を積むと積まぬとは、取も直さず佛德を發揮するか發揮しないかの問題である。佛恩師恩を思ふものは決して忽にしてはならぬ重要の問題であります。

一二　流罪後の聖人(下)

我聖人の巡化は、常州稻田を中心として、信濃、上野、下野、下總、相模、武藏の各地に及び、其間下野高田專修寺の建立あり、歸依の道俗日に月に多きを加へて、布敎の基礎漸く堅く、眞壁の眞佛、井東の顯智、飯沼の性信を始めとし、名ある門弟數十名、その中聖人の遺囑をうけて、關東の布敎に從ふもの

二十四名、これ聖人の歸洛にあたり、豫め撰びて後事を托し給へるもの、世に稱して二十四輩といふもの卽ち是れである。今なほすげの小笠に、あかざの杖、遠く聖人の御舊跡を訪ね、二十四輩を巡禮して、在世の御苦勞を偲ぶこと實にゆかしくも尊きことである。その他、小島の八房の梅、如法寺の火の井戸、鳥屋野の逆竹、安田の三度栗、山田の燒鮒、田上のつなぎ萱、更に鎌鼬を加へて、越後の七不思議と稱ふるが如き事、殆んど妄誕に似たれど、これまた聖人敎化の跡をしのび、當時諸人の歸依いかに厚かりしかを知るべき、信念修養の好資料である。

我聖人の稻田御滯在中、衆生濟度に惟れ日も足らず、遂に關東布敎の基礎を定め給ひしことは言ふまでもなく、茲に特に記憶すべきは、敎行信證といへる

一段の名目を立てゝ、一宗の規模として、我淨土眞宗を開き給ひしことである しかも是れ聖人、奇を好み新を衒ひ給ふにあらず。總序にいはく。『爰に愚禿釋の親鸞、慶哉西蕃月支の聖典、東夏日域の師釋、遇ひ難くして今遇ふことを得たり、聞き難くして已に聞くことを得たり、眞宗の敎行信證を敬信して、特に如來恩德の深きことを知る、斯を以て聞く所を慶び、獲る所を嘆ず矣』。また末尾にいはく『慶哉、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す、深く如來の矜哀を知り、良に師敎の恩厚を仰ぐ、慶喜彌至り、至孝彌重し、茲に因て眞宗の詮を鈔し、淨土の?を摭ぶ、唯佛恩の深きことを念ひ、人倫の嘲りを恥ぢず、若し斯の書を見聞せん者、信順の因となし、疑謗を緣と爲し、信樂を願力に彰し、妙果を安養に顯さん矣』。卽ち首尾の文によりて一部の主意を案

ずるに、『彼の三國の祖師、おの〳〵一宗を興行す、所以に愚禿勸むるところ、更に私なし』。たゞ御恩の深きことを宣べ、佛德の高きことを讃嘆なされる外はないのである。

この教行信證を御製作なされしに就て、おぼろげながら當時の御模樣を窺ひたてまつるに、其引用し給へる經律の文、及び菩薩の論文、其他、人師の疏釋等、いづれ多年來の御蘊蓄によるものならんも、其之れを蒐め給ひし精力と勞苦に至りては、なか〳〵容易ならざることであつたらうと思はれます。また用ゐ給ひし料紙墨筆の類に至るまで、決して御充分でなかつたに違ひない。淺草報恩寺の寶庫に藏まつてゐる御親本などは、紙質も一定せず、反古同樣の紙あり、糊付せし紙あり、或は粗末なる黃色の紙などあり屑物樣の紙を、片々補綴

して全紙となし給ふもあり、實に其御不自由なりし有樣、思ひやるさへ恐れ多いやうであるとの事である。それに就けても、私共は決して日常使用の品物などに、贅澤なことや、不足がましい思ひを起してはなりませぬ。蓮如上人は御廊下おとほりの際、紙切の落ちてゐるのを拾ひ、兩の手におしいたゞき、「佛法領のものをあだにするかや」と仰せられたとのことである。くれ〳〵も冥加をわきまへ、萬事粗末に取扱ふては濟まないことであります。

一三　聖人の歸洛

聖人の關東に留まり給ふこと、前後凡そ二十有餘年、歸洛の志、頻に動き後事を門弟に托して、上洛の途に就き給ふ。時に貞元元年八月上旬、我聖人ま

さに六十歳の御時である。或はいふ五十八九歳の頃なりと。供奉の門弟は、顯智房、專信房、下妻の蓮位房、及び飯沼の性信房、眞佛、專空の兩人、また武藏國矢口の渡まで、見送り奉る。

途中鎌倉にて一切經校合の事あり。聖人北條家の請に應じて參預したまへり其時をり〳〵將軍、執權等の出座ありて、種々の珍物を下し、盃酌のみざり、面々數獻の沙汰に及ぶ。聖人別して勇猛精進の僧の威儀をたゝしくましますことなければ、たゞ世俗の入道俗人等に同じき御振舞にて、魚鳥の肉味をもきこしめさる。或日一同の御膳の上に新鮮なる鱠を供へらる。聖人袈裟をもとかずきこしめさるゝこと常の如し。其時、西明寺の禪門北條時賴、開壽丸とて未だ九歳なりけるが、傍近くさしよりて聖人に密語せられるやう。「あの入道ども、

面々魚肉の折は、袈裟をぬぎて食するに、善信の御房、いかなれば袈裟御着用ありながら食しましますぞ」やと。聖人の仰せにいはく「あの入道達は、常に是の如き魚肉を用ゐさせ給へば、之れを食する時は必ず袈裟をぬぐべきことゝ覺悟のあいだ、今もまたぬぎて食し給ふにやあらむ。善信は身常に貧しくして、是の如き珍味はたまさかなれば、いそぎたべんと、心もおぼろげに、袈裟ぬぐことも忘れはてゝ候云々」開壽丸殿、「その御答へ、恐らくは御僞言なり、定めて深き御所存なるべし、開壽幼稚なればとて、御蔑如にこそ」とて立ち去り給ひき。またあるとき、先きの如くに袈裟御着用ありながら、魚食ありたれば開壽丸殿、また先きの如く尋ね申さる。聖人また忘却したりと答へましまします。そのとき開壽丸殿、「さのみ御廢忘あるべからず。これしかしながら、幼少の愚

意深義をわきまへ知る可らざるによりて、御所存をのべたまはざるならむ、まげてたゞ實義を述べさせ給へ」と、再三こざかしく望み申されたれば、聖人のがれ難く、「さらば今、我が所存のほどを申し述べんに、きこしめされ候へ。まれに人身をうけて、生とし生けるものゝ命を亡ぼし、肉味を貪ること甚だしかるべからず。されば如來の制誡にも、この事殊にさかんなり。然れども末法濁世の今時衆生無戒の時なれば、保つものもなく、また破するものもなし。これによりて、剃髪染衣のそのすがた、たゞ世俗の群類に心同じきが故にこれらを食すとても食するほどならば、かの生類をして解脱せしむるやうにこそありたく候へ。然るにわれ名字を釈氏にかるといへども、心、俗塵にそみて、智もなく德もなし、何によりて彼の有情を救ふべきや。是によりて、袈裟はこれ三世の諸佛

解脱幢相の靈服なり。これを着用しながら彼れを食せば、袈裟の德用をもて、濟生利物の願念をやはたすと存じて、これを着しながら彼れを食したり。冥衆の照覽を仰ぎて人倫の所見を憚らざること、かつは無慚無愧のはなはだしきに似たり、然れども所存かくの如し」と云々。このとき開壽丸殿、幼少の身にてありながら、感氣面にあらはれ、隨喜最も深かりしと。

この一場の物語は、『口傳鈔』にのせられたるまゝを寫したのである。これにつけても、我聖人の肉食なされし御精神を、慥に認めらるゝ。おもてに戒律堅固の相をよそほはぬながらも、心に平等大悲の佛心を體し、濟生利物の願念、常におろそかならず、ふかゝ冥衆の照覽を仰ぎたまふ御所存のほど、たふとしともたふとき事である。

事果てゝ鎌倉を立ち出で、やがて箱根の險阻にかゝり給ふ。顧みれば、雲煙縹渺たる關東の野、宿緣淺からざる教化の地、いまは早や眺めやう〳〵隔たりつ、こゝ一瞥の名殘をしまるゝ關の東西、都戀しき心にまして、なほ偲ばるゝ法の友、法の燈火うしなひて、迷ひの闇路踏みまどふ、人やあらんと聖人は、わがなきあとのことゞも心細く、お思召のほどこまやかに、供奉しまつれる門弟の方々に語らせたまひ、性信房に言ひふくめて、關東に還らしめ給ふ。性信房は聖人のお心根察しまゐらせて、有り難くも、またかたじけなく、とゞめあえぬ涙のうちにも、別離のかなしみいとゞ切なく。「これまで折角御供仕りしもせめて御往生のきはまで奉仕參らせんとおもへばこそ、今お別れ申しなば、いつの世にかは逢ひ奉るべき」と、聲をあげて打ちなげけば、聖人また御法衣

の袖に涙をとゞめ給ひ。

病む子をばあづけてかへる旅の空
こゝろはこゝに殘りこそすれ

名殘をしきは、我れとてもいかで劣るべき。されどあとに殘れる關東の同行、我れなきあとに、法門の誤まり亂るものあるやもはかられず、されば我が年來の苦心も水の泡となりぬべし。汝、關東にかへりて、人々の法義を引きたて、諸共に手を引きあふて、往生の素懷を遂げられよ。親鸞戀ひしとおもはゞ、我心常に同行を離れねば、法門弘通に力を盡くすべしと、懇に諭し給ひ。心なく〳〵別れ路、おもひ惹かるゝ師弟の契り、すげの小笠を傾ぶけて、たがひの姿かくるゝまで、見返り見送る西東、なかを隔つる夕かすみ。

さても聖人は、性信房と別れをしみ給ひし後、夜を徹して箱根の山路を踰え、はるかに行客の蹤をおくりて、夜もすでに曉更におよび、月もはや孤嶺にかたぶく頃、漸く人屋の樞にちかづきたまへば、まことに齡傾ぶきたる老翁立ち出でて、聖人を崛請し、慇懃の饗應を儲けて、さまざまにもてなし奉り、箱根權現の靈夢、感應の空しからざるを喜び、たゞびとならぬ聖人の洪德を仰ぎしといふ。これ偏に我聖人の德澤既に遠近に及び、かねて一たびはその化益にあづからんと、旦暮ふかく煩ひし心の結ぼりて、かゝるいみじき靈夢を得たりしなるべし。我等、聖人の教を奉じながらも未だ聖人を夢みず、聖人の德を慕ひまゐらす心の切ならぬは、ふかく恥づべきことである。

聖人はみち〳〵化導を垂れながらも、遠江、三河、尾張、伊勢を經、年を重ねて美濃より近江に入り、同國木部といへる鄉にしばらく錫を留め、天女降りて錦を織りしてふ錦織寺を御建立なされ、かねて霞が浦にて感得したまへる阿彌陀如來の尊像を遺して、本尊とし、嘉禎元年八月御歸洛なされたのである。時に聖人六十三歳の御時であつた。

聖人の木部御留錫中、傳ふべき逸話として、例の田植節の歌がある。

五劫思惟のなはしろに　兆載永劫のしろをして
一念歸命のたねをろし　自力雜行の草をとり
念々相續の水ながし　往生の秋になりぬれば
このみとるこそうれしけれ

孤や莚を田の畔にしきて、男、女の田植うるさまを眺め、節詞おもしろく、田

植歌にあはせて、御化導なされし聖人の面影、思ひ浮べるさへ、尊く勿體ないことである。今なほ、錦織寺の境内に、當時聖人御化導の舊跡として、菰川といへる川に架つてゐた橋の石材が保存せられ、年々宗祖報恩講の御迨夜には、此田植歌の勤行が營まれ來つたとの事である。飽食暖衣、奥座敷に晝寢して、一口の法門をも說くことなく、念佛の一聲も、殊勝にとなへぬぐらゐの遺弟は冥加につきて、無事な日暮のできるが不思議である。

一四　歸洛後の聖人

聖人はじめ洛都を出でて關東に赴きたまひしより、既に二十有餘年、星移り物替はり、洛都の風光、定めて我聖人の感懷を深からしめたことであらう。『聖

人、故郷に歸つて往事をおもふに、年々歳々夢の如し、幻の如し、長安洛陽の栖もあとをとゞむるに懶しとて、扶風馮翊、ところ〴〵に移住したまひき。五條西洞院わたり、これ一の勝地なりとて、しばらく居をしめたまふ』本傳。聖人はそゞろ亡きにし恩師法然聖人のことゞも思ふにつけても、不思議にも再び都に歸りて老の身を養ふ吾が運命の奇異なるを感じ、忌日を定め、親しく法會を修して師恩を報謝し、傍ら著述を事として、佛德を讃嘆し。『淨土文類聚鈔』、『愚禿鈔』等、漢文の御聖敎を始とし『ゐなかのひと〳〵、文字のこゝろもしらず、あさましき愚痴きわまりなきゆへに、やすくこゝろへさせむとて』三帖和讃、その他數々の和語聖敎を御製作なされたことである。

なほ聖人の御歸洛後は、聖人の德を慕ひ、敎を稟くるもの數多く、曾て御化

導を蒙りし關東北越の門葉、千里を遠しとせずして御跡をしたひ、都に上りて面のあたり、御教をうくるものあり。かの常陸國那荷西郡大部郷の平太郎、熊野に參詣せんとて、途、都によりて聖人に疑を質し、聖人爲めに本迹二門の由をのべ、三經の奥義、七祖の肝腑をくだきて、一向專念の義を諭したまひしが如き、卽ち其一である。また聖人は遙るゞ訪ね來るものに對しては、必ず浮世の樣々な咄しや、また佛法のことについても、學問道理の御沙汰はなさらなかつたのである。

おの〳〵十餘國のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たつねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。しかるに念佛よりほかに往生のみちなも存知し、また法文等をもしりたらんと、こゝろにくゝおほしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にも、ゆゝしき學生たち、おほく座せられて候なれば、かのひと〳〵にもあひたてまつりて、往生の要よく〳〵きかるべきなり。親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信するほかに別の子細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、總してもて存知せざるなり云々。（歎異鈔）

なんたる直截簡明なる御教化でありましやうか、私共はこれでなくては到底安心が出來ないのである。限りある智慧を以て朝、夕を待たぬ不定の生命をかゝへながら、限りなき如來の智慧を窮め、幽玄なる心靈上の問題を解決せんことは、眞に望みなき事にて、たゞ〳〵煩悶に煩悶を累ね、遂に不可解を叫んで悶る死ぬより外はないのであります。

また聖人は、しば〳〵書を寄せて不審をたづね、道を求むるものに對して、

は、懇に返書をしたゝめて諭へ導かれたことは、『御消息集』や『末燈鈔』の上へで明かに其模樣が知られる。

六月一日の御文くわしくみ候ひぬ。乃至御文のやうおほかたの陳狀よく御はからひとも候ひけり、うれしく候。詮し候ところは御身にかぎらず、念佛まふさんひと〳〵は、わか御身の料はおぼしめさずとも、朝家の御ため國民のために念佛をまふしあはせたまひ候はゞめでたく候べし。往生を不定におほしめさんひとはまづわか身の往生をおほしめして御念佛さふらふべし。わが身の往生一定さおほしめさんひとは、佛の御恩をおほしめさんに、御報恩のために御念佛をこゝろにいれて申して、世の中安穩なれ、佛法ひろまれとおほしめすへしとぞ覺え候。よく〳〵御按候へし云々(御消息集)

此御消息は念佛行者の迫害について訴訟起りたれば、其心得についてお示しなされた御文である。聖人は關東北越の門徒について如何に心を煩はしたまひしかゝ、分るのである。實に此御消息の如きは、眞俗につけての御教訓にて、王

法佛法ともに忽かせにすべからざる念佛行者の心得を仰せられたのであります

達如上人の歌に「二諦相依の意を詠める」と題して

こほるとも知らでふすまをかされたる
一重は君がなさけなるらん

念佛者はとりわき心せねばならぬことである。

此外、記すべきことは澤山ある、しかし今之れを略して信樂房のことに就いて、聖人の高德をしのびまゐらすことゝしやう。信樂房は常陸新堤の人である曾て聖人の御前にて、法文の義理をあやまり、仰せをもちゐずして、本國に遁げ歸つたのである。そこで蓮位房聖人に申し上げるやう、「信樂房の御門弟の儀をはなれて、下國の上は、あつけわたさるゝところの本尊聖教をめしかへさる

べくや、なかんづくに釋親鸞と外題のしたにあそばされたる聖教おほし、御門下をはなれたてまつるうへは、さだめて仰崇の儀なからんかと云々」。聖人の仰せに「本尊聖教をとりかへすことはなはだしかるべからざることなり。そのゆへは、親鸞は弟子一人も持たず、なにごとをおしへて弟子といふべきぞや、みな如來の御弟子なれば、みなともに同行なり。念佛往生の信心をうることは釋迦彌陀二尊の御方便として發起すとみえたれば、まつたく親鸞がさづけたるにあらず。當世たかひに違逆のとき、本尊聖教をとりかへし、つくるところの房號をとりかへし、信心をとりかへすなんどいふこと、國中に繁昌と云々、かへすがへしかるべからず。本尊聖教は衆生利益の方便なれば親鸞がむつびをすてゝ他の門室にいるといふとも、わたくしに自專すべからず。如來の教法は總じて

流通物なればなり。しかるに親鸞が名字ののりたるを、法師にくければ袈裟さへの風情にいとひおもふによりて、たとひ聖教を山野にすつといふとも、そのところの有情群類、かの聖教にすくはれて、ことゞくくその益をうべし。しからば衆生利益の本懷そのとき滿足すべし、凡夫の執するところの財寶のごとくにとりかへすといふ義あるべからざるなり云々」。此問答は『口傳鈔』に掲げられたる通りである。私共は此問答について、いかに我聖人が、寛容の德に富ませられ、また有情利益の願念、ふかくましませしかを、かの一切教校合の際に於ける開壽丸との御問答と共に、深く味ひまゐらすることができるのであります。

一五　聖人の入滅

聖人、弘長二歳十月頃より、門弟の問ひ來んもむつかしとて、御舍弟天台宗善法房尋有僧都の坊舍たる、洛陽三條坊門の北、富小路の西、善法院に移り給ひ其月の末つかたよりいさゝか不例の氣まします。十一月に至りて病未だ癒え給はず。同月二十三四日頃よりは、聖人自ら期し給ふ所やありけむ、口に世事を交へず、たゞ佛恩の深きことを宣べ、聲に餘言をあらはさず、專ら稱名絶ゆることなし。二十七日申の刻御沐浴ならびに御剃髪あそばさる。二十八日午の半に至りて頭北面西右脇に臥し、念佛の息絶え給ふ。座上座下の門人たち、佛日既に滅し、法燈斯に消えぬとて、悲しみの聲止むことなく。凡そ傳へきく人々、知ると知らざるとを問はず、ひとしく涙を流して痛傷せざるはなし。

翌二十九日卯の刻。御門弟の人々、泣く〳〵靈棺を奉じて禪坊を出で、はるかに東の路を歷て、洛陽東山の西の麓、鳥邊野の南のほとり、延仁寺にて荼毘し奉る。超えて三日、遺骨を拾ひて、同じき山の麓、鳥邊野北のほとり、大谷に之れを納め畢る。時に人皇八十九代龜山院の御宇、今を距ること實に六百六十餘年の昔である。

高田正統傳によれば、聖人の上足たる顯智及び專信は、了阿房光正の使によりて聖人の異例に涉らせらるゝを知り、十一月十八日江州守山に着し、翌十九日夜に入りて京に上り、親しく聖人の病を看護し奉りしと云ふ。尙ほ口碑の傳ふる所によれば、曩きに箱根にて別れまゐらせし性信房、旅より旅に綱代笠

常陸、下總、武藏など、到る處に聖人の教を傳へしが、はかりなく聖人の御病篤しときゝ、夜に日を繼ぎて馳せ上り、なつかしき聖人に拜謁を遂げけるに、聖人は病をつとめて之れを迎へ、且つ直ちに關東に還へらんことを諭し、留まりて我病を看護よりも、はやく去つて關東の同行を看病せよとのたまひ、わなゝく手に筆とりて一通の御書をしたゝめ給ふ。

愚禿年つもり、病に犯され候間、追付往生の本意を遂ぐべく候、今は唯極樂の蓮臺にて、一味の衆中を相待つばかりに候あなかしこ〳〵。

弘長二歳十一月　親鸞

別れ路をさのみなげくな法の友
また逢ふ國のありとおもへば

有難やまた逢ふ國のありときく

南無阿彌陀佛のねしになる身は　性信

事のよし、いさゝか疑はしけれど、かねて聖人の關東北越の御門徒に對し、心を煩はし給へるは、御消息中明かに之を認むべく。この一條の物語の如きも、聖人が臨終に至るまで、いかに御門徒の人々を案じ煩ひ給ひしかを知るべき便りにもと、因みに書きしるしおくのである。

尙ほ聖人の御臨終に就て記さねばならぬことは、いかにも聖人の御往生のめでたかりし事である。めでたかりしとて、あながち紫雲たなびき、異香薫じ、佛菩薩の來迎ありしなどの事ではない。我聖人かねて宣はく。『來迎は諸行往生にあり、自力の行者なるが故に、臨終といふことは、諸行往生のひとにいふべし

いまだ眞實の信心をえざるがゆへなり。眞實信心の行人は、攝取不捨のゆへに正定聚のくらゐに住す。このゆへに臨終まつことなし、來迎をたのむことなし信心の定まるとき、往生またさだまるなり』末燈鈔。平生業成の教義は臨終の善惡をいはず、また敢て奇瑞の有無を問はないのである。たゞ聖人の御往生のめでたかりしといふは、聖人が二十九歳にして久しく煩悶せし出離の一大事を解決し、爾來滿九十年の間、化他の大行に盡瘁し、自信教人心の志既に滿ちてつゆいさゝかも思ひおくことなく、『生けらば念佛の功つもり、死なば淨土へまゐりなんとてもかくても、この身には、思ひわづらふ事ぞなき』和語燈。すでに佛の御用をつとめおえし我身は『若し閉眼せば、加茂河にいれて魚にあたふべし』改邪鈔。臨終の善惡は過去の因緣にまかせていさゝかも惑ふべきにあらじ。

たゞ期すべきは往生の大果、疑ふまじきは必至滅度の願益、あら嬉しや南無阿彌陀佛〳〵と。口に世事をまじへず、專ら稱名絶ゆるひまなく、念佛の息とともに淨土に歸り給ひしことである。實に我聖人の御臨終は、美はしとも、めでたしとも、まことに例ふべき語のないのである。

ところが私共の臨終はいかゞであらうか。盡きぬ未練に心を惹かれ、妻や孫子の愛着に胸も紊れて、前後の辨へなく、病苦に逼りては一聲の稱名さへ口に浮ばず、あら苦しや痛ましやの聲と共に、息の根の絶ゆるやも計られないのである。されど平生業成の宗旨、臨終の善惡を問はぬ味ひは全くこゝにあるのである。『淨土へいそぎ參りたき、心のなくて、聊か所勞の事あれば、死なんずるやらんと心細く覺ゆる事も、煩惱の所爲なり。久遠劫より今まで流轉せ

る苦惱の舊里は棄て難く、未だ生れざる安養の淨土は戀しからず候事、まことに能々煩惱の興盛に候にこそ。名殘惜しく思へども、娑婆の緣盡きて、力なくして終る時に、彼の土へは參るべきなり。いそぎ參りたき心のなき者をことに憐み給ふなり。是につけてこそ、いよ〳〵大悲大願はたのもしく往生は決定と存じ候へ』歎異鈔。あゝ私共はもはや何とも申しやうのないのである。かゝる淺ましき煩惱强盛のいたづらものが、よしや未練の泣き死にをしやうと、病苦に狂ひ死にしやうと、我聖人の御跡慕ふて往生の本意を遂げ得らるゝことまことに是れ不思議の願力、我聖人御化導のたまもの、何とも箇とも謝すべき辭の絕えはてゝ、たゞ感涙に咽ぶよりほかはないのであります。

一六　聖人の滅後

聖人、四男三女あり、其季彌女、卽ち覺信尼公是れなり。夙に聖人の法統を受けて、心を眞宗興立に傾け給ふ。滅後十一年卽ち文久九年の冬、聖人の嫡孫たる、善鸞の子、如信上人と計り、高足の遺弟顯智等の輔翼により、普く諸國門弟の同意を得て、大谷の遺骨を吉水の北に移し、新たに佛閣を建てゝ、聖人御一流の本跡とし以て遺弟歸向の源を定め給ふ。此年十一月五日、龜山天皇久遠實成阿彌陀本願寺の勅號を賜ひ、特に宣旨を垂れさせらる。

弘長二歲十一月二十八日入寂親鸞聖人閉二淨土眞宗一引二導凡俗一化益遍二布日域一永潤二法滅時一浴二大谷流一聚現當利益神明擁護無レ疑知天長地久育民瑞也

依賜二紫宸宮一應レ稱二久遠實成阿彌陀本願寺一者也綸旨如レ件

文永九年壬申十一月五日　　左大史藤原朝臣基親奉

こゝに浄土眞宗の法基始めて定まり、聖人の遺迹嚴として萬代に垂る。

此時に當りて相傳の宗義いよ〳〵張り、遺訓ます〳〵盛なること、頗る在世のむかしにこえ、すべて門葉、國郡に充滿し、末流處々に遍布して幾千萬といふことを知らず。稟教を重んじ、報謝を抽きんづるともがら、朝に境關千里の雲をはらひ、夕に隴道萬程の露を踏み、年々廟堂に詣し、涙を拭つて遺骨を拜するもの、いまに至つて絶えず。寫瓶傳燈、血脉相承して二十幾世に及び、千島の濱、筑紫の端、門末寺院のあらざるなく、遺教遠く海を渉りて、支那、朝鮮、西比利亞、樺太等の各地に布き、法波遙に南洋諸島をかすめて、米大陸の

岸を洗ふ。吾等幸に此昌運をむかへて、聖人の遺教を奉ず、ひとしく念力をそゝぎて、大法の弘通をはかり、一宗の繁昌を期するは、まさに聖人の恩德に酬い奉るべき唯一の務めである。先德は『專修正行の繁昌は遺弟の念力による』と示し。また『佛恩を報せんがため、かつは師德を謝せんがために、この法を十方にひろめて、一切衆生をして、西方の一土にすゝめいれしむべきなり』眞要鈔と仰せられてある。お互に忘る可からざるは、實に『自信教人信、大悲傳普化』の大訓であります。

序に一宗の基礎を定め給ひし覺信尼公の事を記しておきましやう。尼公は彌女と稱し、初め日野廣綱卿の息所となられしが、廣綱卿歿せられて寡婦となり家に歸りて常に聖人にかしづき、後薙髮して覺信尼と號せられたのであります

聖人七十一歳の時、即ち寛元元年十二月二十一日、聖人御自作の眞影と共に御遺跡を讓りたまひし、尼公への讓狀なるものがある。

讓渡すこと

身のかはりを讓渡もの也、さまたけをなすへき人なし、努々煩ひあるべからず、後の爲に此ふみつかはすものなり、穴賢々々

これを以て覺信尼公が、如何に聖人の正統をうけ、御信任の篤かりしことがわかる。尼公亦能く聖人の迹を繼ぎて、御本廟を建て、遂に本願寺の法統をして今日あらしむに至りし效蹟は、我等聖人の敎を奉ずるものゝ、決して忘れてはならぬことである。大谷本廟の餘間には今なほ嚴かに尼公の御影が掛けられてある。右の御影を拜して尼公の御効蹟を思ふと共に、尼公の御母公たる惠信尼

即ち玉日姫が、聖人の化度を助けて、潔き一生を送られし御事蹟をしのびまゐらせ、我淨土眞宗が由來如何に婦人に因緣あつく、また如何に婦人の力を待つことの多きかを思はずにゐられない。『おみなとて、すめらみくにのたみなればつくさゞらめや、はげまざらめや』との國歌一首を詠じて、過ぐる三十七八年戰役の際、一般婦人に先きだちて、奉公の大義をのべられし、本派本願寺裏方の行爲も、また實にそれが決して偶然のことでないことが思ひ知らるゝのであります。

なほ因みに本願寺のことを記さんに、覺信尼の創立されし大谷の本廟は、其後兵燹に罹り、更に寛正の法難、即ち叡山の破邸により、殿堂燒失して、蓮師は眞影を奉じて大津に遁れ、後年山科に本願寺を建設したまひ、天文年間に至

りて、近江六角定頼及び日蓮宗徒の爲めに、山科の殿堂も燒燬せられて、大阪石山に移り、天正年間石山の法難によりて、紀州鷺の森に退轉し、次で泉州貝塚に移り、天滿に移り、天正十九年に至りて、平安七條坊門堀川、卽ち今の地に移つたのである。是より先き、大谷の本廟は、山科本願寺の創立されしより、蓮師の門弟願知及び其子孫の監守する所となり、元龜年間、武家の爲めに廟地を横奪せられ、天正十七年に至りてその舊地を復し、慶長八年、更に公府の命によりて、廟地を烏邊野延仁寺山、卽ち今の地に移したのである。而して良如上人より以來漸次に境内を擴張し、殿堂を修築し、大谷移轉より百〇七年、卽ち宗祖四百五十年大遠忌の法要豫修されし頃には、閑雅幽邃の地、老樹蒼欝の間に、輪奐宏壯の祖廟を見ることができたのである。試みに祖廟に詣でゝ、靈

前に跪づけば、山青く水清くして、七百年前の古を語り、鳥啼き、花落ちて幽玄の思ひ只ならず。感慨胸にせまりて、涙のたるゝのを覺えないのである。

一七　聖人の行狀

法然聖人の御教化は、實に簡易直截で、在家無智のものも、一生造惡のものも、容易く安心のなし得らるゝ凡夫往生の捷徑である。『人々後世の事申しけるついでに、往生は魚食せぬものこそすれといふ人あり。或は魚食するものこそすれといふ人あり。とかく論じけるを、聖人きゝ給て、魚くふもの往生をせんには、鵜ぞせんずる。魚くはぬものせんには、猿ぞせんずる。くふにもよらずくはぬにもよらず。たゞ念佛申もの往生はするぞ』和語燈錄。とは何たる平易な

御教でありましやうか。されど疑ふまじきを疑ひ、信ずべきを信せぬは凡夫の習ひ、大無量壽經に、彌陀本願の謂れは遺憾なく說き明かされながらも、其機の眞實、卽ち彌陀本願の極意は、觀經を待ちて現はされたのである。とかく我等は事實でなからねば早合點がむづかしい。法然聖人の御敎化は明かに在家凡夫の往生を說き示し給ひしとはいへ、矢張口音說法で、御身の行狀は持戒堅固にして、おさ〳〵聖道自力のお方と違はなかつた。そこで月輪兼實公をして出家の往生と在家の往生との優劣如何を問はしむることになつたのである。かゝる疑問は、私共のやうな後生の事に氣がつかず、出離の一大事を何とも思はぬものには起らないのであるが、眞實、心から出離を思ひ、後生を憂ふるものには、是非とも起さずにゐられない疑問であります。當寺、法然聖人の御在世

には、思ひの外、人々の心が此世の無常を感じ、出離を求むる心の熾んなりし時であつた。かの熊谷蓮生房の如き、はしなく無上菩提の心動き、安居院の聖覺法印を訪ひ、懷中に短刀を用意して、おのれ罪業深ければ、並々のことにてはとても成佛すべき身にあらず、願くば我腹をも裂き腸をも斷ち、手足を斬りてなりとも、我助かるべき道あらば、示めさせ給へと願ひしほどである。かゝる强盛なる求道心の起りしものには、やゝもすれば却つて平易簡明なる絕對他力の救濟が味はゝれず、凡夫往生の道を聞きながらも、イヤ待て、出離ほどの一大事などてしかく易す〳〵決定が出來やうかと、疑ひまどひ、本願の不思議を不思議と信じ得られぬ恐れがあるのである。そこでたゞ口音說法のみでなく事實の上にて在家凡夫の往生を確實に示すべき必要は、當時必ず差迫つてゐ

たに違ひなからうと思はれる。而して我聖人こそ、即ち其事實的證明者、言ひ換ふれば身を以て在家往生に對する疑問を解決なされたお方ではあるまいか。

聖人かねての御持言には、『われはこれ賀古の教信沙彌の定なり』と仰せられてあつた。教信の事は永觀の『往生十因』等に見えてゐるが、もと興福寺の英傑にて、唯識因明の學を窮めし人である。然るに深く南浮の苦を厭ひて、專ら西方の樂を欣ひ、人目を憚りて跡を晦まし、播州賀古野口の佳景、西晴れて詠遊の意澄む勝地に留まりて、形ばかりの庵を結び、西方に墻せず、本尊を安んせず、聖教をも持たず、非僧非俗の形をあらはし、常に念佛を唱へてその餘は忘れたるが如く、日頃は人に身を委せて日を送り、耕耘の時間斷なく念佛せしを以て、雇ひ使ふところの人、呼びて阿彌陀丸と號けしといふ。かくの如きこと

凡そ三十年、其の死するや、身を野犬鴟鳥の群り競ひ啖ふに任せ、而も其死貌損せずして、眼口笑めるが如く、香氣薫馥せしとのことである。我聖人また日頃田夫野叟に身を伍して、自ら愚禿と名のり、是非しらず、邪正も分かぬ此身と稱へ、善惡の二つ總じて以て存知せずとて、たゞひたすらに佛願の不思議を仰ぎて、稱名退轉なくあらせられ、また教信沙彌が屍を野外にさらせし如く、我聖人は『某閉眼せば加茂川にいれて魚にあたふべし』と仰せられたのであります。『最須敬重繪詞』には聖人の御行儀を讃嘆して『身に才智をたくはへながら、ことさらに學解を事とせらるゝすがたもなし。こゝろを淨域にすますといへども、あながちに世塵をとほざかる行儀をも表し給はざりけり』と述べ、我聖人また『たとひ牛盜とはいはるとも、もしは善人、もしは後世者、もしは佛法

者とみゆるやうに振舞ふべからず』改邪鈔と仰せられてあります。此等の語によりて思ひ浮ぶれば、非僧非俗、飽くまで凡夫示同の相を現はしたまへる我聖人の御一生が、あり〳〵と眼の前に畫かるゝやうであります。

聖人、東國御經廻のとき、御風氣とて三日三夜ひきかつぎて水漿も通じたまはず、また常のときの如く御腰膝をうたせらるゝこともなく、御煎物も遠ざけられ、御看病の人も近づけられず、三箇日を經て、噫いまはさてあらんと仰せごとありて、御起居もとの如く平復あらせられた。そのとき惠信の御房たづねられて、「御風氣とて兩三日御寢のところ、いまはさてあらんと仰せごとあることなにごとぞや」と申されしに、聖人のたまひけるやう、「われこの三箇年のあひだ、淨土の三部經をよむことおこたらず。おなじくば千部よまばやと思ひて

これをはじむるところ、またおもふやう、自信教人信、難中轉更難とみへたれば、みづからも信じ、ひとををしへても信せしむるほかは、なにのつとめかあらんに、この三部經の部數をつむこと、われながらこゝろえられずと、おもひなりて、このことをよく〳〵案じさだめん料に、そのあひだは、ひきかつぎてふしぬれど、つねのやまひにあらねば、いまはさてあるらんといひつるなり」

口傳鈔と。この御物語はなんでもなきやうなことに思はるゝが、いかにも我聖人の信仰の淳一無垢にして、いさゝかの衒ひなく、私を挾み給はぬことが味はるゝのであります。私共はかねて聖人の述懷和讃を拜見して、聖人が田夫野叟の群に入りて、名利を避け、在家止住の行狀にならはせられたるは、慥に當時山上佛敎の貴族的なるを厭ひ、權榮を貪りて餘念なき山法師達の墮落に憤

慨したまへるに因るならんかと思ひたりしに、この口傳鈔の御物語を味ふて、我考への全く誤まつてゐることを覺つたのであります。我聖人御一生の行化は實に自信教人信、卽ち自ら彌陀本願のたうとさを信じ、已むに已まれぬ佛智廻向の大悲心に催ほされて、おのが領解のまゝを人に傳へ、自他ともに手を引き合ふて、往生の素懷を遂げたまふ外はないのであります。『親鸞は弟子一人も、もたず候。』そのゆへは、わがはからひにて、ひとに念佛をまうさせ候はゞこそ、弟子にても候はめ、彌陀の御もよほしにあつかりて、念佛まふし候ひとを、わが弟子とまふすこと、きはめて荒涼なり』歎異鈔とのお語も、こゝに至つてはじめて其眞味が味はれるやうであります。

あ、聖人の御一生は、佛の大悲に動かされたる他力信仰の生涯であつた。滿

九十年の行動は、慈悲の使命を完うせらるゝ常行大悲の事業である。『佛の大悲は苦ある者に於てす、心ひとへに常沒の衆生を愍念したまふ』。我聖人は、古來多くの明僧知識が、たゞ岸上にありて聲を高くし、咽喉を涸らして、煩惱の泥中に溺れつゝある我等を呼びたまふことのもどかしく、直ちに我等と同じく煩惱の泥中に投じて、在家止住の行狀を示し、おのが肩を與へ、手を引きて、我等を慰め勵まし給ふ御同情の切なる、またこれ如來矜哀の遺るせなき御心の、我聖人の上に動かせたまふものなるかを思へば、私共はたゞ聖人の御恩德を念ふことの深きと共に、如來の窮みなき大悲心に對して、ひたすら感謝せずにゐられないのであります。

一八　聖人の宗風

聖人は此世と未來とを擧げて佛に委せ、善惡ともに忘れはてゝ、無我に本願をお歡びなされたのであります。「是非しらず、邪正も分かぬ」身の、いかで吾れと我計らひを雜ゆべき。『往生淨土のためには、たゞ信心をさきとす、そのほかをばかへりみざるなり、往生ほどの一大事凡夫のはからふべきことにあらずひとすぢに如來にまかせたてまつるべし』執持鈔。たゞ夫れ如來に委せたてまつるほか別の仔細なし。本願不思議なれば善も欲しからず惡も恐れなし。『本願を信せんには、他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきがゆへに、惡をも恐るべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへに』歎異鈔。あゝ絶

對他力の救濟、確固不動の信念、何たる美しき御覺悟でありましやうか。

かゝる絶對他力の信念を以て此世五十年の日暮をなすのは、取りも直さず、是れ如來の御下に參ゐるべき道中である。『眞實信心の行人は、攝取不捨の故に正定聚に住す。正定聚に住するが故に、必ず滅度にいたる』眞要鈔。順次の往生さても掌に物を入れて見るが如く明かに、しば〳〵起る妄念煩惱は、さながら光を蔽ふの雲霧にひとしく、雲霧蔽へども、眞實信心の光は毫も妨げらることなし、『三毒の煩惱はしば〳〵起れども、まことの信心はかれらにもさへられず、顚倒の妄念は常にたへざれども、更に未來の惡報を招かず』眞要鈔。今は早や殘る思ひも盡きはてゝ、喜ぶべきは如來の御恩、煩惱の强盛なるにつけても、たゞ仰ぐべきは本願の不思議なり。『よろこぶべきこゝろをおさへてよろこばせ

ぬは煩悩の所爲なり。しかるに佛かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよ〳〵たのもしくおぼゆるなり』歎異鈔。言はふやうなき廣大の御恩、いかにして之れを報ずべきであらうか。

さりながら、かゝる廣大の御恩にあまへて、煩悩にほこり、邪見をつのるが如きは、ふかく愼まねばならぬことであります。

われ往生すべければとて、すまじきことをもし、おもふまじきことをもおもひ、いふまじきことをもいひなどすることは、あるべくも候はず。貪欲の煩悩にくるはされて欲もおこり、瞋恚の煩悩にくるはされて、れたむべくもなき因果をやぶるこゝろもおこり愚痴の煩悩にまどはされて、おもふまじきことなども、おこるにてこそ候へ。めでたき佛の御ちかひのあればとて、わざとすまじきことどもなし、おもふまじきことゞもおもひなどせんは、よく〳〵この世のいとはしからず、身のわろきことを、おもひ

しらぬにて候へば念佛にこゝろざしもなく、佛の御ちかひにも、こゝろざしのおはしまさぬにて候へば、念佛せさせたまふとも、その御こゝろざしには、順次の往生もかたく候べからん。さも同朋にもれんごろにこころのおはしましあはゞこそ、世をいとふしるしにても候はんとこそおほえ候へ。よく〳〵御こゝろえ候べし。（末燈鈔）

あしゝと知りながらもかへりみず、煩悩の起るにまかせて振舞ふは、煩悩にくるはされたるにあらで、わざと煩悩にふける ものと云ふべく、放逸無慚の甚しきものである。

煩悩にくるはされて、おもはざるほかに、すまじきことをもふるまい、いふまじきことをもいひ、おもふまじきことをも、おもふにてこそあれ、さはらぬことなればとて、ひとのためにも、はらくろく、すましきことをもしいふましきことをもいはゞ、煩悩にくるはされた後にはあらで、わざと、すましきことをもせば、かへす〳〵あるましきことなり（末燈鈔）

むかしは彌陀のちかひをもしらず、阿彌陀佛をもまふさずおはしまし候ひしが。釋迦彌陀の御方便にもよほされて、いま彌陀のちかひをきゝはじめておはします身にてさふらふなり。もとは無明の酒にえひて、貪欲瞋恚愚痴の三毒をのみ、このみめしあふて候ひつるに、佛のちかひをきゝはじめしより、無明のえひもやうやうすこしづゝさめ、三毒をもすこしづゝこのますして、阿彌陀佛のくすりをつねにこのみめす身となりておはしましあふて候ぞかし。しかるに、なを無明のえひもさめやらぬにかさねてえひをすゝめ、毒もきえやらぬになを毒をすゝめられ候はんこそ、あさましく候へ（末燈鈔）

薬あり毒を好めと候らんことはあるべくも候はずと覺ゆ（同上）

即ち彌陀の本願は薬である。無明の酔をさまし、煩惱の毒をいやす醍醐の名薬である。いかなるわる酔も、いかなるおそろしき毒も、この本願の力を妨ぐるほどの力はない。されば私共は本願の力によりて、無始已來造り累ねたる煩惱惡業を一時に消滅していたゞくことは、決して疑ひなきことである。さりな

がらかゝる不思議の本願あればとて、煩惱の起るにまかせ、罪業のつもるを恐れぬは、薬ありとて毒を好むしはざである。實に不心得千萬のことゝいはねばなりませぬ。

聖人はこの信前信後の心得に就ては明に水際をたてゝ御諭しなされてあります。

はじめて佛の誓をきゝはじむる人々の、我身のわろく、心のわろきをおもひしりて、この身のやうにては、いかで往生せんずるといふ人にこそ、煩惱具足したる身なれば、わが心の善惡をはたさせすむかへたまふぞとは申し候へ。かくきゝて後、佛を信ぜんと思ふ心深くなりぬに、まことにこの身をもいとひ、流轉せんことをもかなしみて、ふかくちかひをも信じ、阿彌陀佛をもこのみ申しなんとする人は、もとこそ心のまゝにて惡しきことをも思ひ、惡しき事をもふるまひなんとせしかども、今はさやうの心をすてんと、おぼしめしあはせたまはゞこそ、世をいとふしるしにても候はめ、又往生の信心は

釋迦彌陀の御すゝめによりて、おこるさこそみえて候へばさりともまことの心おにらせたまひなんにはいかでかむかしの御心のまゝにては候べき(末灯抄)

卽ち、善も欲しからず、惡も恐れなしとは、おのが罪障の恐しきに戰慄し、救ひを求めて煩悶する求者に對して、本願の貴きことを知らせ、絕對他力の不思議を說き示す爲めの敎語である。既に本願を信じ他力を仰ぐ身はよしあしともに佛に任せて、たゞ其廣大なる恩德を思ひ、かつは過ぎし我身の淺ましかりしを悔ゐ、せめては惡を止め善を修むる心掛けのなくてはならぬ筈である。否な、われと我が身に左樣な心掛けの起らふ筈はなくとも、他力回向の信德として、おのづと起らせていたゞくのであります。

さにもかくにも、他力不思議を信じ候人は、いかで邪見になりたまふべき。しかも私のつくろひは

なけれど、世間も見事におさまり、法義相續して、念佛をも申し、常々よろこぶなり。これすなはち他力信心のあらはれにて候。信心まめやかによろこばせ候に、何とて邪見にはなり候べき。すでに常行大悲の益とて、我心は邪見なる根性にて候へども、佛心は大慈悲是なりにて候へば、佛心の慈悲、おのづから信ずる行者の心に入みち、我たしなむ心なけれども、おのづから物をもいたはり、世の中の道をもやぶらぬようになり候べし(敎名集)

此の如く信心決定のものは、佛智のもよほしにより、自づと心もやはらぎ、身も修まり、世の中の道をやぶらぬようになりゆくものである。それに如來の本願を信じながら、なほ惡もやまず善もつとまらぬといふのは、畢竟我が心得の足らぬからである。御恩を忘れ、御冥見をわきまえぬからである。『御一代聞書』にいはく、『一心にたのみ奉る機はよくしろしめすなり。彌陀のたゞしろしめすやうに心中をもつべし。冥加をおそろしく存ずべきことにて候との義

に候』

照し見る佛いますと知るならば
唯朝夕にうれしはづかし

人が見たり、聞いたりして居ると思ふさへ、あまりなことは出來ぬものである。然るに佛は夜となく、晝となく、見たり聞いたりしてゐたまふばかりでなく、人知れず思ふ我胸の中まで、一々照し見たまふのであります。實に恐れ愼まねばならぬことである。

たゞに我心をつゝしみ、我行ひを正しくするばかりでなく、ひろく世の中の爲めに働き、多くの人々に幸福あれかしと勤むるはまた念佛行者の大切なる心掛けであります。『王法は額にあてよ、佛法は內心に深く蓄へよ』とは、卽ち我

聖人相傳の制規にして、『御消息集』には『念佛まふさん人々は、わが身の科とはおぼしめさすとも、朝家の御ため、國民のために、念佛をまふしあはせたまひ候はゞ、めでたふ候ふべし、乃至佛の御恩をおほしめさんに、御報恩のために御念佛こゝろにいれてまうして、世のなか安穩なれ佛法ひろまれとおぼしめすべし』とお示しなされてある。卽ち君を思ひ、國を思ひ、世の人のためを思ひおの〳〵の分に應じて、力のあらん限りを盡くし、如來のしろしめすまゝにまかせて、御恩を送るのが念佛行者のしるしである。我聖人の御遺訓を奉ずる信者の務めである。

信心決定し、念佛申させたまふしろしには、昔のあしかりし、心をも思ひなほし、世間の道にもそむかず師をうやまひ、主君に忠義をつくし、親に孝をなし、兄弟にしたしく、妻子にむつまじく、他人の

交りには仁義を守り、伴同行にはれんごろにあらんこそ、後世を願ひ、往生淨土の身となりたるしるしとも申すべきよく〳〵御心得候べし（數名集）

みほとけのこゝろのまゝにまかせゆく
身にあやまちのいかであるべき

しられじと思ふ心のはつかしき
たゞすみたまふほとけいませば

いかばかり佛のみむね痛めけむ
むかしおもへばいとゝくやしき

本願寺の聖人 終

大正十二年四月十日印刷
大正十二年四月十五日發行

定價金參拾五錢

編纂兼發行者 足利宣正
印刷者 村上勘兵衛
印刷所 京都市西洞院通七條南入 内外出版株式會社印刷部

發兌元 京都市堀川本願寺内 龍谷會
振替口座大阪三二一二番

不許複製

504
174

終